

帝國實業讀本

卷七

3759
Ha7
資料室

42535

教科書文庫

4
810.
44-1933
200030
2103

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

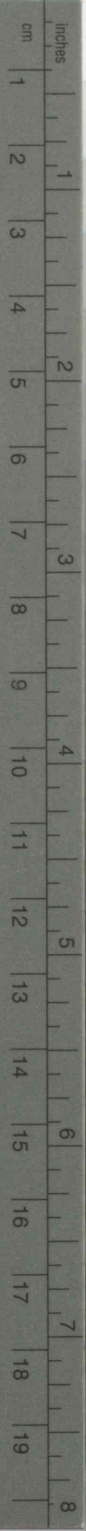


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



275.9
H47

資料室

文部省檢定
昭和八年八月二日 實業學校語科用

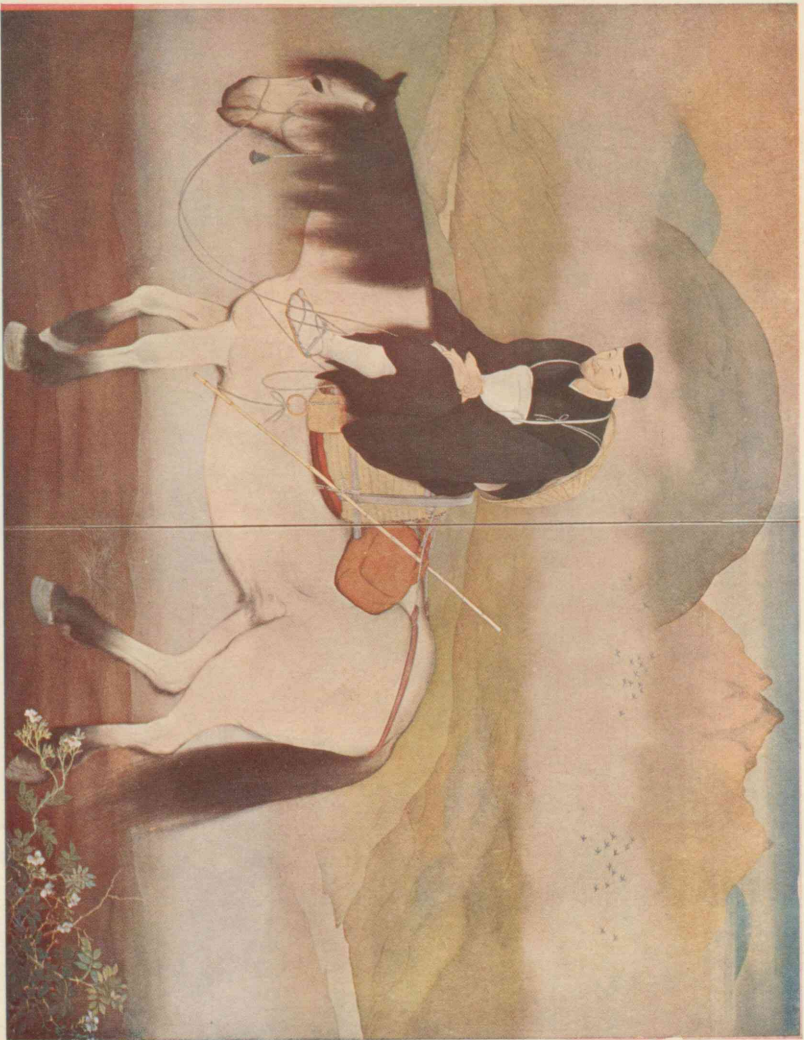
文學博士 芳賀矢一 編
文學博士 上田萬年
文學博士 長谷川福平 訂補

帝國實業讀本

東京
合資會社 富山房發兌

廣島大學圖書印

廣島大學
39118
圖書



旅人 野田九浦筆

帝國實業讀本 卷七

目次

一	をりふしの移り變り……………	吉田兼好……………一
二	手折りし枝をしたふ春風……………	室鳩巢……………四
三	詩人西行……………	藤岡作太郎……………二〇
	櫻咲く日本よ(自修文)……………	吉田絃二郎……………七
四	櫻あらしひ……………	(續狂言記)……………三
五	晩春の別離(詩)……………	島崎藤村……………三六
六	奥の細道その一……………	松尾芭蕉……………四四
七	奥の細道その二……………	松尾芭蕉……………四〇
八	旅と宿驛……………	鳥野幸次……………四一

九	北京から……………	田山花袋……………	五
一〇	源三位……………	(平家物語)……………	六
	文學と氣品(自修文)……………		六
二	小松内府その一……………	(平家物語)……………	七
三	小松内府その二……………	(平家物語)……………	七
三	平家物語論……………	五十嵐 力……………	七
四	青葉若葉(古俳句)……………		八
五	信濃路の旅……………	正岡子規……………	八
六	みとり日記……………	小林 一茶……………	七
七	芭蕉と一茶……………	荻原井泉水……………	一〇三
八	郷土の魅力……………	相馬御風……………	一五
	海を思ふ(自修文)……………	中村孝也……………	一三
九	芳流閣上の血戦……………	瀧澤馬琴……………	二五

一〇	天地の心(短歌新調)……………		一三
二	流泉啄木……………	(今昔物語)……………	一七
三	美しき故國……………	矢代幸雄……………	一四
三	黄菊白菊(古俳句)……………		一四
四	四季小品……………		一四
	一 春 雨……………	中島廣足……………	一四
	二 風 鈴……………	香川景樹……………	一四
	三 きぬた……………	清水濱臣……………	一五
	四 秋の山田……………	藤井高尙……………	一五
	五 冬のこゝろ……………	伴 蒿 蹊……………	一五



Faint vertical text in the right margin, likely bleed-through from the reverse side of the page.

帝國實業讀本 卷七

一 をりふしのうつりかはり

吉田兼好^(一)

^(一)鎌倉時代の文學者、歌人。京都の人。正平五年(二〇一年)八月十八日寂。年六十八。

^(二)「春はたゞ花のひとへに咲くばかりも、の哀は秋ぞまされる」(拾遺集、よみ人知らず)

氣色立つ

名にこそ負へ

おぼつかなき様したる

をりふしのうつりかはること、もの毎に哀なれ^(二)もの哀は秋こそまされ^(一)と人毎に言ふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやうく、氣色立つ程こそあれ、をりしも雨風うち續きて、あわたゞしく散過ぎぬ。青葉になり行くまで、よろづに唯心をのみぞ悩ます。花橘は名にこそ負へれ、尙梅の匂にぞ、古の事もたちかへり、こひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなき様したる、すべて思ひ捨てがたき事多し。

(一)陰曆四月八日。
(二)賀茂祭。もと四月の中の酉の日に行はれた。

(三)六月晦日の大祓。なごしの祓ともいふ。

わさ田

(四)平安時代の代表的小説。五十四帖。紫式部の著。
(五)平安時代の代表的隨筆。十卷。清少納言の著。
今更に言はじともあらず

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行く程こそ、世の哀も人のこひしさもまされと人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめ葺く頃、早苗とる頃、水雞のたたくなど心細からぬかは、六月の頃あやしき家に夕顔の



くひな(上原桃畝筆)

月の頃あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるも哀なり。六月ばらへまたをかしたなばた祭るこそなまめかしけれ。

やうく夜寒になる程雁鳴きて来る頃、萩の下葉色づく程、わさ田刈干すなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。言續くれば、皆源氏物語、枕草子などに事古りにたれど、同じ事また今更に言はじともあらず。思しき事言

あぢきなし
かいやり捨つべき物

遣水

かにはほひ
妙なる色に
あらはれて
みのはれ花
や春をつく
らむ

兼好
すさまじ

(一)十二月十九日
から二十一日
まで三日間宮
中に行はれた
佛事。
(二)朝廷で十陵八
墓に幣帛を奉
られるその使
やんごとなし

はぬは腹ふくる、わざなれば、筆に任せつ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべき物なれば、人の見るべきにもあらず。さて冬枯の景色こそ、秋にはをさく劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとままりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。

ふ
かにはほひ
妙なる色に
あらはれて
みのはれ花
や春をつく
らむ

吉田兼好筆蹟

年の暮果てて、人毎にいそぎあへる頃ぞ、またなく哀なる。すさまじき物にして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細き物なれ。御佛名荷前の使立つなどぞ、哀にやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎに取重ねて催し行はる、様ぞいみじきや。

(一)十二月晦日に
行はれた鬼や
らひ。

ことごとくし

(一)追儼つゝなより四方拜に續くこそ面白けれ。晦の夜いたう闇きに、松ども
も點して、夜半過ぐるまで人の門たゞき走りありきて、何事にかあ
らん、ことごとくしくのゝしりて、足を空に惑ふが、曉方より流石に音
なくなりぬるこそ、年の名残も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭
るわざは、この頃都にはなきを、東の方には尙する事にてありしこ
そ哀なりしか。かくて明行く空の氣色、昨日に變りたりとは見えね
ど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路の様、松立てわたして、花やかに
嬉しげなるこそまた哀なれ。

— 徒然草 —

二 手折りし枝をしたふ春風

(二) 室 鳩 巢

或時翁、前日節義の事を語り候ひしが、あとにて思ひ候へば、未だ
申し残して候。前日申しつる事どもにて考へて見給へ。盛衰榮枯は
世の常なり。それによりて志を變へぬは、これまた士の常なり。若し

(二)徳川幕府の儒
官。名は直清。
江戸の人。享
保十九年(一七
三九年)歿。
年七十九。義
人録、驗墓雜
話等の著があ
る。

えりもとにつ

時の模様につきて覺悟を變じ、世話に言ふえりもとにつく様にて
は、何をもて士と申し侍るべき。

水邊の楊柳綠煙の絲。馬を立て君を煩はして一枝を折る。

唯春風の最も相惜しむあり。慇懃に更に手中に向つて吹く。

(一)これ唐の楊巨源が楊柳の詩なり。この三四の句意、婉にして面白く
覺え侍り。よりてその意を翁が詠める歌に、

なれて吹く名残やをしき青柳の

手折りし枝をしたふはる風

楊柳の人に折られて、はや木を離れたりとて、春風のそれをよそに
して吹きなば、いかに情なかるべきを、尙その手折りし枝を去りや
らで、惜しみがほに吹くこそ、いと優しく覺え侍れ。古より忠臣義士
の、盛衰存亡をもて心を變へぬに喩へつべく候。翁むかし源平盛衰
記を讀みて、源氏の士には渡邊瀧口競、平家の士には彌平兵衛宗清

(一)中唐の詩人。
字は景山。唐
の貞元五年
(西紀七八九
年)に進士に
及第し、年七
十で致仕した。

(一)和漢混合體の漢文で書いた鎌倉幕府の日記五十一卷。池魚の災

(二)第八十代高倉天皇の時代(一八三〇年—一八四〇年)倉皇

(三)清盛の第二子(一八四五年)一ノ浦の戦いで源軍に捕はれて、近江の篠原に斬られた。三十九年に

が事を感じしが、また東鑑にて、伊東九郎祐清が事を見て感じけるまゝ、三烈士の傳を半ば撰び置きしが、未だ稿を脱せざるうちに池魚の災にかゝり、その後二たび草を起す事なくうち過ぎし程に、今はその文をば跡もなく忘れ侍り。渡邊競は源三位入道頼政が所從の士には第一の者なり。然るに治承年中、頼政、高倉宮に勧めて兵を起せし時、京師を急に發して、倉皇として三井寺に赴きしが、うち忘れてやありけん、競にかくと知らせざりし程に、競暫く猶豫して家にありしを、平宗盛聞きて、日比競が魁偉なるを見て、おのが所從にせまほしく思ひしが、頼政が親臣なれば、請ふべき様もなかりしに、このたび競ひとり都に残りしと聞きて、六波羅に參れ。と人して言はせければ、参りけり。宗盛對面して、汝今より我に仕へば、入道の恩にはまさるべし。とて、小槽毛といふ馬に貝鞍おき、乗りかへの料とて遠山といふ馬を引添へ、黒絲をどしの鎧冑まで皆具してたびけ

時の花をかざしにす

眷顧



室鳩巢

り。競畏まり賜はりて、ほくそ笑ひて罷り歸りぬ。一族、家人うち寄りて、入道殿これ程の大事を思ひたち給ふに、ひとり取残されしは眞實に遺恨なり。大將のかく語らひ給ふは辭み難し。時の花をかざしにせよといふ事もあれば、唯このまゝにてあれかし。と言ふを、競いやとよ、勇士の義さはあらず。とて、宗盛よりたびける鎧著て、小槽毛に乗り、郎等七騎うちつれて、三井寺へとうち出でしが、六波羅の門前を通りし時、馬に乗りながら門の内へのぞきつゝ、高聲に言入れけるは、競こそ只今下し賜はりし馬に乗り、三井寺へ罷り越し候へ。御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れ難く候へば、このたび死を共に致すにて候。御門前を空しくうち過ぎんはほいなく候へば、御暇を申し候。とて、三井寺に至り、頼政と一所になりしが、その後宇治

(一) 忠盛の第五子
清盛の異母弟
母は池の禪尼
文治三年(一
八四七年)
年五十五(一
歿)

橋の合戦に潔く討死してけり。彌平兵衛宗清は平頼盛の士なり。平治の亂に、頼朝幼少にて頼盛の家に囚はれしを、頼盛の母老尼、清盛に乞ひて死を救ひけり。その時宗清、頼朝を朝夕にいたはりしが、平家西國に落ちし時、頼朝かねて頼盛に通問して疎意なき由を言はせける程に、頼盛一人一門に叛きて、都に留りけり。その後平家未だ亡びずして西海にありし時、頼朝舊恩を謝せん爲に頼盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必ず召具せらるべき由を言ひおこされければ、頼盛關東に赴くとて、宗清に「いざ、つれて下らん」と言ひしに、宗清言ひけるは、「頼朝某に下れと候は、定めて昔のなじみを思ひ出でて、所領引出物などして、そのかみ扶助せし勞に報ぜんとこの事にてあるべく候。今更源氏に諂ひて、その蔭に依り候はんは、西海にある朋友どもの承る所も口惜しくこそ候へ。君はかくて都に安堵しおはしまし候へども、御一門は何れも西海に流落し給ひ、日夜安き御心も

あるまじく候。此所にて思ひやり奉るもいたはしくこそ候へ。鎌倉に御越し候うて、頼朝某が事を尋ねられ候はば、をりふし勞る事ある由を仰せられて給はり候へ」とて、鎌倉には行かざりけり。その後



(筆嶋香口谷)朝頼の山橋石

西海へ下りけるにや、その終を知らず。伊東祐清は伊東祐親が第二子なり。頼朝伊豆に流謫せられし時、祐親に依りておはせしが、祐親禁衛の役に當りて京師に赴きし間に、快からぬ事ありて、歸りて後これを害せんとするを、祐清悲しむ。頼朝を深く愛護し、竊に遁れ去らしむ。その後頼朝兵を起して伊豆より相模に赴きし時、祐親平家の身方として、大庭景親等と石橋山に至りて、頼朝を追ひ襲ひけり。その後頼

(一) 神奈川縣(相
模國)足柄下
郡石橋村の南

勸賞

(一)石川縣(加賀國)江沼郡。壽永二年(一一八四三年)源平兩氏の地で戦つた。

(二)國文學者、文學博士。金澤市の人。明治四十三年(一九一〇年)歿。國文學全史、平安朝、日本繪畫史、國文學史、國文學史話等の著者がある。

(三)藤原定家。脚僧。天涯放浪の行

朝既に東國を平定し、自ら大兵を率ゐて駿河に至られし時、祐親を生捕りて至りしを、その罪を決するまで、祐親をば祐親が婿三浦義澄に預けられ、祐清を召出して、勸賞を行はれんとありしに、祐清、唯御恩には早く殺され候へ。父囚はれ、その子勸賞せらるゝ、法や候。若し我を殺し給はずば、平家に歸すべし。と言ふに、さればとて我を救ひし者を殺すべき様なしとて、宥して放ちやりけり。祐清それよりすぐに京師に奔りて平家に屬し、後篠原の合戦に、終に討死を遂げけり。この三人、時代も大方同じく、志節も相似たり。その清風高義、源平の間に求むるに、その類少く覺え侍り。

——駿臺雜誌——

三 詩人西行

(一)藤岡作太郎

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しうし、鎌倉室町の世、抑、歌道に於て定家(三)を難ぜん輩は、冥加もあるべ

(一)二卷、西行の家集。噴々

北面の士

厭離の志

(二)京都府(山城國)紀伊郡に宮址がある。

からず、罰を蒙るべき事なり。と言はれし時、稱讚の聲また定家に譲らず。近世に至つて定家の價值いたく墜落したれども、山家集の一書は、尙いかなる歌人の机邊をも去らず、西行の名今に噴々たるは抑、何の故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立つ。義清また勇敢にして弓術を善くす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど義清は榮利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機に就いては、或は傳へていはく、曾て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、また明日を期して別る。次の朝參朝せんとして、約に隨ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ねれば、殿は昨夜頓死し給へり。とて、若き妻、老いたる母

惕然
(一)清信士度人經の偈句

愛著の絆

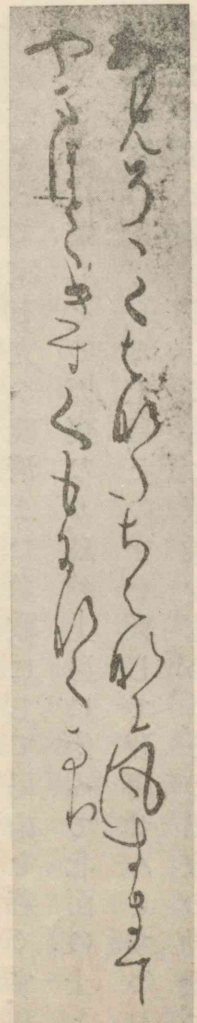
あめそよく
はなたちは
なに風すき
てやまほと
ときすくも
になくなり
(藤原俊成の詠)

(二)第七十五代崇徳天皇の御代、一八〇〇年

(三)右兵衛佐頼朝

(四)弘法大師

の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、恩を棄て無爲に入る。は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて取りすがるを、思ひ切りて縁より下に蹴落し、これこそ愛著の絆を斷つ始ぞと、願もせで、家を遁れ



蹟筆行西傳

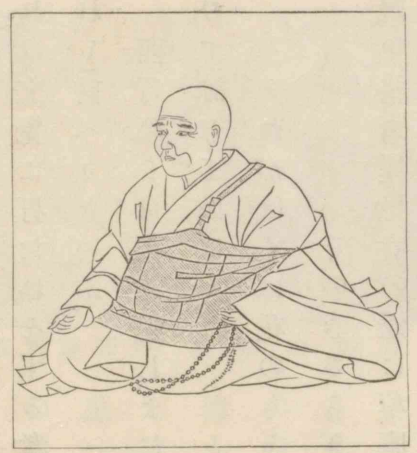
出で、嗟峨に至りて剃髮せりと稱す。かくて名を西行また圓位といふ。出家する時保延六年にして、西行歳正に二十三なりきといふ。西行既に世を遁れて高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に参り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見参し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて大師の靈場を拜み、それより筑紫に

桑門

悠々自適
(一)鎌倉時代の豪僧、俗名を遠藤盛遠といふ。正治元年(一一八九年)寂、年八十。

手ぐすねを引

遊べり。常に謂へらく、桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。一枚の笠、一本の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ自然を友とし、悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺(二)これを惡み、弟子に告げて



覺 文

いはく、遁世の身ならば一筋に佛道修行の外他事あるべからず。數寄を立てて此所彼所に嘯きありく條、憎き法師なり。いづこにても見あひたらば頭を打割るべし。その後、高尾の法華會に行脚の僧の参り會ひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。誰ぞと問へば、西行と申す者。と言ふ。文覺手ぐすねを引き、望のかなひつる體にて、明障子をあけて出づ。暫しまもりて、年比承り及びたるに、御尋ね悦び入り候。とて、迎へ入れて響應に餘念

言ひがひなの
法師どもや
面様

涅槃

幽契違はず

なし。弟子たちはいかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、この體たらくにて、西行は無事に歸り去りしかば、日比の仰に違ひたるは、と怪しみ問ふ。文覺答へて、あら、言ひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面様か。文覺をこそ打たんずる者なれ。と言へりといふ。

西行深く月花を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせん事を思ひて、詠じていはく、

ねがはくは花のもとにて春死なん

そのきさらぎのもちづきのころ

晩年洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日、七十三歳にて入滅せり。

我が國古來詩人多しと雖も、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へし者、前後僅かに三人。西行、

(一)連歌師。飯尾
氏。花の下と
號した。紀伊
の一人。文龜二
年(一一八二)
年(一一八二)卒。
私淑

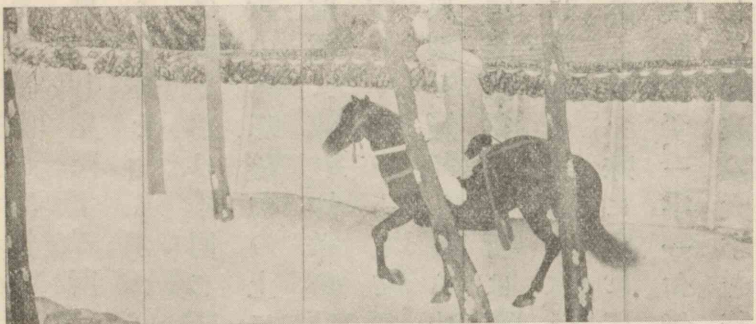
私淑

一期を劃す

風月に放浪し
雲水に吟嘯す

吟囊を肥す

跼蹐す



大和路の宗祇 (井澤蘇水筆)

(一)宗祇、芭蕉これなり。西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離のをりををも厭はず、私淑してその跡を追ひし者、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、また西行、宗祇が行狀を慕ひし者とす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、各その道に一期を劃せし三家が、何れもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せし事を思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

抑、平安時代の貴紳淑女は、賀茂、桂、二川の流域數里の間を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐し、足畿外に出でず、一生の經過極

京洛

詞花言葉

籛却
隱微の聲

粉本

めて單調に、感情を刺衝する物なければ、隨つて思想の發展もある事なし。見聞する所は東山の花、西山の紅葉、何時も同じ京洛の風物より外を知らざれば、詠ずる所の歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、唯同じ詞花言葉を飾るのみにて累代繼承し行けば、和歌の思想辭句の上にも自ら典型を生じて、天真を忘れ、實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊その内容は空しく、滔々として風をなせる時、西行獨り蹶起して從來踏襲せる典型を籛却し、自ら山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得する所は萬朶の花と咲けり。平安の末、崇徳院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲惨なる實境を詠ぜる事の、世上一般の題詠と選を殊にすればなり。わけて西行が歌ふ所、一も古人の粉本を模倣せず、一字一句皆己が肺腑より出づ。數百年の後尙名聲噴々として天成の大才と許さるゝも、また宜ならずや。――國文學全史――

自修文

櫻咲く日本よ

吉田紘二郎

身を分けて見ぬ梢なくつくさばや

よろづの山のはなのさかりを
これ程に花に對して貪るばかりの愛著を感じた詩人が、世界にあるであらうか。

しかし、この花に對する愛著の念は、日本人にならば西行ばかりでなく、殆どすべての人に見出す事が出来るはずだと思ふ。殆ど私たちがすべてが、春になれば、見ぬ梢なく花を見つくさうと思ふ。

日本といふ私たちの祖國が、一番はつきり私たちの心に刻みつけられて来るのは、櫻の花が咲く日である。花が咲いて來れば、日本人全體が、世界のどこの詩人よりも花を愛し、花をたゝへる事を知つてゐる。西行の歌はたまく、日本人のすべての櫻の花

(一)小説家、明治十九年佐賀縣に生れた。島白雲、飛ぶ鳥、島紀行、吉田紘二郎全集等。小説、感想集がある。

(二)西行の歌、一首の意は、一首の身に、一つの花を、全國の時に見ることは、出來ないから、身なうかつら、全身の盛りを分けて見たいのだ。

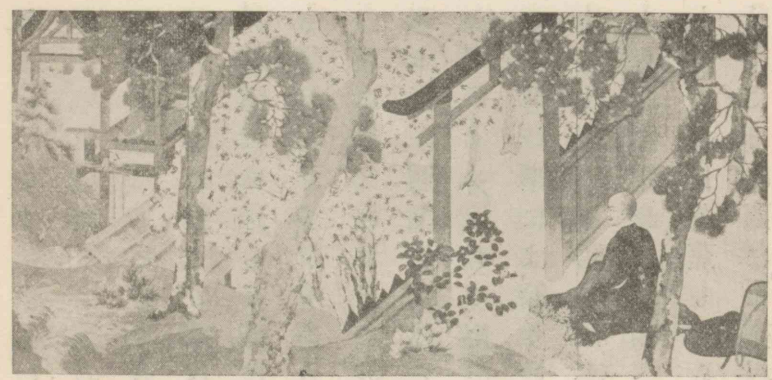
祖國
祖先以來に住んで來た國、父母の國、自國

旅枕たびね、煙潮えんしほ、海水かいすいのしぶき、聖地せいち、靈場れいじやう。
 (1) Chaucer: イギリスの詩人。西紀一三〇〇年。
 (2) Canterbury Tales: イギリス古文書の傑作で、叙詩である。カンタベリー聖院に参詣する三十二人の人々が馬上で話を集めた體に作られた。カンタベリイはロンドン東部の南約一〇〇キロメートルの首府である。礼所めぐりれいじよめぐり、禮拜らいはいの功德こくどくをつむ爲ために佛閣ぶつかく

に對する愛著を代言したものに過ぎない。私は日本に生れた事を有難いと思ふ。殊に花が咲く日にしみじみそれを感じる。山の雪が解け始める。もう南の方からは花の便りが来る。三月も半ば過ぎれば、薩摩、日向あたりの山櫻が咲始める。その頃南方を立つて北の方へと日毎旅枕たびねを重ねる人々は、三月の二十四五日頃になれば、北九州の山櫻が綻はなびてゐるのに出會ふ。中國から畿内、東海、東山と、北へくと旅を續ければ、短い花の命とは言ふものの、勿來關、平泉まで行くうちには、四十日以上の花を見る事が出来る。全く三月から四月と日本國中が花に包まれてしまふ。潮煙しほけむりに閉されて、あるかなきかに見える小さい隱岐や對馬の島までもが、日本である限りは、雲の様な花に包まれてゐる。西洋では聖地巡禮といふ事が昔からある。チヨイサー(1)の(2)カンタベリー物語などを讀むと、今の日本の御彼岸の札所めぐり(3)を思

を巡ること。

世捨人
隠遁した人。



行 矢澤弦月筆

ひ出すが、もうあゝいふのんきな遍路は、かの地では遠い昔になくなつてしまつたであらう。日本ではまだ四國めぐり、大和めぐり、どこそこの新札所めぐりといふものが、なかく盛んである。そしてそれは花の盛を中心にして行はれてゐる。札所めぐり、聖地めぐりといふが、實は花をめぐりての旅である。花遍路である。西行にしたところで、實に一生花をめぐつての旅人であつた。花巡禮であつた。彼は秋の山に鹿も聽いた。雪の野も歩いた。彼は寂しい世捨人の様にも思はれる。けれども、彼くらゐ日本の春

(一)「心なき身に
もあはれは知
られけりし
立つ深の秋の
夕暮」山家集
西行

相
すがた。あり
さま。

湖畔詩人
十九世紀の初
イギリスの北
部の湖水地方
に住んだウオ
ーヅウオース、
サウジイ、コ
ルリツヂ等の
詩人の一派を
いふ。

(二)Wordsworth
イギリスの詩
人。(西紀一七
七〇年—一八
五〇年)

(三)芭蕉の句

(四)蕪村の句

を愛し、日本の春を解した詩人はないであらう。

ねがはくは花のもとにて春死なん

そのきさらぎのもちづきのころ

彼は春に對しては貪慾であつた。^(一)しぎたつ澤のほとりの秋を
見た頃には、恐らく彼は人生無常の相をそのまゝに受容れて、死
も恐れなかつたであらう。けれども再び旅に春を見た刹那、吉野
の花に包まれた日に、彼の執心は燃えたであらう。彼は二十年も
三十年も猶生き續けて行きたいと思つたであらう。湖畔詩人ウオ
ーヅウオースであつたかと思ふが、この附近の風光は實にいゝ。唯
一つ悪い事には、餘り景色がいゝ爲に、死ぬ事がいやになる。とい
ふ意味の事を語つた事がある。西行も恐らく同じ事を感じたであ
らう。伊賀から大和への途すがら、春なれや名もなき山の朝霞
と歌つた日、芭蕉も恐らく同じ事を感じたであらう。菜の花や月
は東に日は西に、蕪村ならずとも、春の日の日本に生れた幸福

を感じないではゐられないであらう。

西行も芭蕉も世捨人である。しかし、印度あたりの世捨人とは
まるで違つてゐる。どこまでも世を捨てきれぬ人たちである。彼
等が世を捨てたといふのは、餘りに自然を愛したが故である。心
行くまで自然に浸されたい爲に、暫く世の煩はしさを避けたば
かりである。自然を味はふといふ點では、誰をも彼をも受容れて
ゐる。日本國中の人々を一緒に誘ひ出して、自然を味はつてゐる。
日本人はこそ、してゐるとよく非難される。しかし、花の盛
の日本人を見ると、あながちさうでもない。花に恵まれた日本の
自然が、春の日になれば、日本人の心を特に淨化してくれるのか
知らぬが、ともかく花の盛の日本人は、愛すべき國民である。佛詣
や神詣にかこつけて四國中をめぐり、大和をめぐつて、花を見て
歩く事の出来る子供らしさを失はぬ民族である。西行といひ、芭
蕉といひ、一生のなまけ者であつた。日本の秋を、日本の春を、残る

淨化する
きよくする。

萬葉時代
 の意、萬葉集
 は我が國最古
 の歌集で、仁
 德天皇から淳
 仁天皇の時ま
 での歌を集め
 たもの
 分別くさい人
 分にもつた人
 根本其角、芭
 蕉の門人中の
 第一人者、寶
 永四年(二二
 六七年)歿、年
 四十七
 (二)服部嵐雪、芭
 蕉の門人、寶
 永四年(二二
 六七年)歿、年
 五十七

三
 限なく見つくしたいが爲に、家業を捨てて歩きまはつた大きな
 子供である。
 日本人程詩を作る國民は他にないであらうと誰でもないふ。私
 もさう信じてゐる。萬葉時代から日本人は、花下の行樂を無性に
 樂しむ事を知つてゐた。日本人は愛すべきなまけ者であつた。そ
 の中でも一番大きななまけ者が、西行と芭蕉とであつた。それか
 ら後の世の歌人や俳人たちには、分別くさい人たちが多過ぎて
 しまつた。其角にしる、嵐雪にしる、蕪村にしる、分別があり過ぎる。
 この事は、歌人の場合でもやはり同じ事だが。
 それはともかくとして、日本人がこれ程多く詩を作るといふ
 事は、やはり恵まれた日本の自然からであると思ふ。日本に櫻が
 咲く間は、日本人は恵まれてゐると思ふ。日本人は詩を作る事を
 忘れてはならない。
 わけもなく懐かしい櫻。わけもなく暖い感じの櫻。わけもなく

あてやか
 上品
 (一)「さま」の
 事思ひ出す櫻
 かな「芭蕉」

(二)西行の「世を
 捨てて身はな
 きものと思へ
 ども雪の降る
 日は寒くこそ
 あれ」の歌に
 「芭蕉が讀して
 「花の咲く日
 は浮れ」と附
 けた。

えいたさぬ

可憐な櫻。わけもなくあてやかな櫻。わけもなく哀な櫻。わけもな
 く「さま」の事思ひ出させる櫻。誰の爲に咲いてくれるのか、誰
 の爲に散つて行くのか、待たれる日のみ長くて、散る事の餘りに
 早い櫻。
 無常の實相を餘りに美しくも、餘りに傷ましくも私たちの心
 に刻みつけてくれる櫻。日本中の山も、原も、町も、今日は花の霞に
 包まれてしまつた。私は恵まれた日本を思ふ。
 西行も、芭蕉も、花の咲く「今」は「浮れ」したであらう。
 今日、日本人に取つて一番明るい幸福の日である。と同時に、
 一番もの哀な日である。
 四 櫻あらそひ
 アド「これはこのあたりの者で御座る。この頃は、いづ方も花の盛ぢ
 やと申す程に、花見に参りたう存ずれども、暇がなさに参る事もえ

いたさぬ。もはや暇になつて御座る程に、今日は花見に参らうと存ずる。先づ太郎冠者を呼出し、申しつけう。やい、太郎冠者あるか。
シテ、はあ。アド、お前にか。シテ、お前に居ります。

アド、汝を呼出す事、別の事ではない。この頃は方々の花盛ぢやといへども、暇がなさに、花見に行く事もならなんだ。もはや暇になつた程に、花見にいでうと思ふが、何とあらうぞ。シテ、これは珍しい事を仰せられます。この頃は櫻の盛ぢやと申す程に、櫻を御覽ぜられうとあれば、尤もで御座るが、珍しからぬはなを御覽ぜられて、何にさせらる。アド、いや、おのれは何事をいふ。櫻も花も同じ事ぢや。シテ「これは頼うだ人も覺えぬ事を仰せらる。さ様に仰せられたらば、人中で恥をかゝせられう、身どもは苦しい御座らぬが。アド、して、汝がその様に言ふは子細があるか。シテ、なか、子細こそ御座れ。はなが見させられたくば、私のはなを見させられ、餘所へ御座るま

頼うだ人

言語道斷

でもない事

(一)紀貫之の作。拾遺集卷一春の部に於てある。

(二)平忠度の作。平家物語卷九に出る。

(三)よみ人知らず。古今集卷一春の部に於てある。

でも御座らぬ。アド、いや、おのれは言語道斷の事を言ひをる。汝が面なは鼻といふ。花といふは別ぢや。シテ、さ様では御座らぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、花とは詠まれませぬ。アド、なか、でもない事を言ひをる。その歌を詠うで聞かせい。シテ、詠うで聞かせたらば、肝を潰させられう。アド、急いで詠め。シテ、心得ました。

櫻(一)ちる木の下かぜは寒からで
そらに知られぬ雪ぞ降りける
これはなんと。アド、こちにも花といふ歌がある。シテ、さらば詠うで聞かせられい。

行き(二)くれて木の下かげを宿とせば
はなや今宵のあるじならまし
シテ、この方にもまだ御座る。

やま櫻わが見にくれば春がすみ(三)

(一) 小野小町の作
古今集卷二春
の部に出てる

(二) 謡曲「小鹽」の
一節

總別
むざとした事

(三) 詩人、小説家
名は春樹。明
治五年長野縣
に生れた。新
生、飯倉、よ
り、藤村詩集
春、嵐、藤村全
集等の著があ
る

峰にも尾にもたちかくしつゝ

アト(一)それならこちにもある。

花の色はうつりにけりないたづらに

わが身世にふるながめせしまに

シテ(二)それならばこちには謠に御座る。アト(一)うたへ、聽かう。シテ(二)櫻か

ざしの袖ふれて。アト(一)一段の謠うたふいたし様が御座る。やい、太郎

冠者。謡花見車くるゝより、月の花よ待たうよ。月の花よ待たうよ。

シテ(一)はあ、これでつまりました。アト(二)總別何も知り居らいで、むざと

した事を言ひ居つて、某と競合(三)ひをる。あつちへ失せい。シテ(一)はあ。

アト(一)えい。シテ(一)はあ。――續狂言記――

五 晩春の別離

(三)
島崎藤村

時は暮れゆく春よりぞ

また短きはなかるらん。

恨は友のわかれより

さらに長きはなかるらん。

君をおくりて花ちかき

高樓(四)までも来て見れば、

みどりにまよふ鶯は

霞むなしく鳴きかへり、

しろき光は佐保姫の

春の車駕(五)を照すかな。

これより君は行く雲と

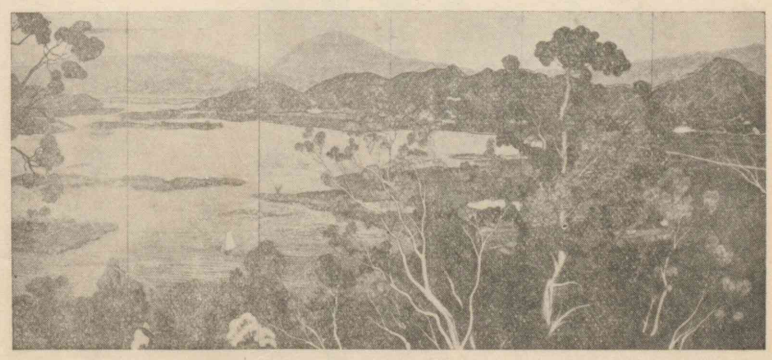
ともに都を立ちいでて、

佐保姫の春の
車駕

(一)伊吹とも書く、
 近江と美濃と
 の境に聳えて
 ある。海抜一
 三〇三メートル
 (二)近江の西部、
 比叡の北方に
 聳えてある。海
 抜八五〇メ
 ートル。近江
 八景の一。

(三)白河法皇。

おもへば琵琶の湖の
 岸の光にまよふとき、
 ひがし膽吹^(一)の山高く、
 西には比叡^(二)比良の峰、
 日は行きかよふ山々の
 ふかきながめを伏仰ぎ、
 いかにすぐれし想をか、
 沈める波にたふらん。
 ながれはむなし、法皇^(三)の
 夢はるかなる賀茂の水、
 水にうつろふ山城の
 みやびの都ゆく春の



(筆村遙田池) 春残の畔湖

元

かすめる姿見つくして、
 畿内にせまる伊賀伊勢の
 鈴鹿の山の波とほく
 海に落つるを望む時、
 いかによろづの恨をば、
 空行く鷺に窮むらん。
 春さり行かば、青によし
 奈良の都に尋ね入り、
 としつき君がこひしたふ
 御堂のうちに遊ぶ時、
 ふるき藝術の花の香の
 伽藍の壁にのこりなば、

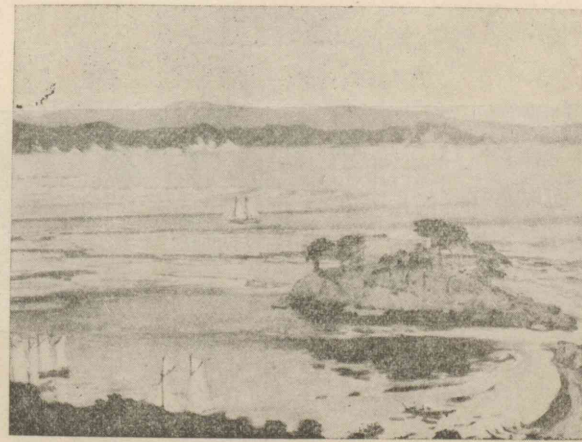


(筆村遙田池) 春残の畔湖

元

(一)阿波(徳島縣)の東北端孫崎と淡路(兵庫縣)の間にあつて、朝夕の間に潮の満ち干の激しさを観るに類する壯麗な世に類する

いかに韻を身にしめて、
 深き思にしづむらん。
 さては秋津の島が根の
 南のつばさ紀の國を、
 めぐりて進む黒潮の、
 鳴門に落ちて行く所、
 あまぎは遠く白き日の
 光をもらす雲裂けて、
 目にはるかなる遠海の
 波のをどるを望む時、
 いかに胸打つ音たかく、
 君が血汐のさわぐらん。



(筆郎八川中) 門 鳴 の 波 阿

(一)兵庫縣(播磨國)明石市の南海岸

(二)兵庫縣(播磨國)明石郡垂水(須磨)と明石との中間

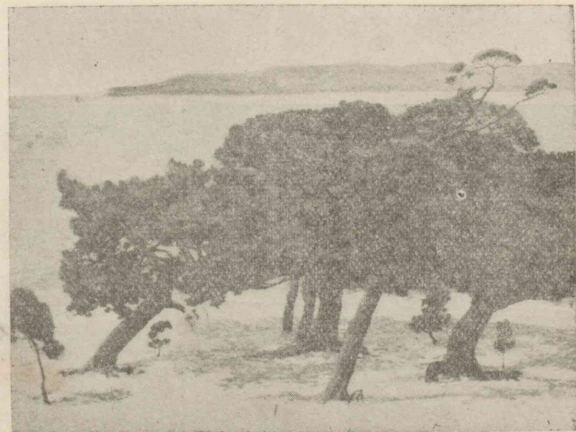
または名に負ふ歌枕、
 波に千とせの色映る
 明石の浦の朝ぼらけ、
 松よろづよの音にひびく
 舞子の濱のゆふまぐれ、
 もしそれ海の雲落ちて、
 淡路の島の影くらく、
 さ霧のうちには鳴きかよふ
 千鳥の聲を聞く時は、
 いかに浦邊にさすらひて、
 遠き昔をしのぶらん。



石 明

ひめごと

げに君がため山々は
雲を停めん、浦々は
磯にながる、白波を
あげんとすらん。よしさらば、
旅路遙かに野邊行かば
野邊のひめごと、森行かば
森のひめごと探りもて、
高きに登り、あめつちの
もなかに遊び、大川の
ながれをきはめ、山々の
神をもよばひ、谷々の
鬼をもおこし、歌人の
魂をも遠く返しつゝ、



舞の子の濱 (鹿子木孟郎筆)

朽ちせぬ琴

清しき聲をうちあげて、
朽ちせぬ琴をかきならせ。
さらば名残は盡きずとも、
たもとを分つ夕まぐれ、
見よ、影ふかき欄干おほしきに、
けむりをふくむ藤の花。
北行く雁はおほ空の
霞に沈み鳴きかへり、
彩ちやなす雲も愁へつゝ、
君を送るに似たりけり。
あゝ、いつかまた相逢うて

もとの契をあたゝめん。
梅も櫻も散りはてて、
すでに柳はふかみどり、
人はあかねど、行く春を
いつまでこゝにとゞむべき、
われに惜しむな、家づとの
一枝の筆の花の色香を。

— 藤村詩集 —

六 奥の細道 その一

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、行交ふ年もまた旅人なり。船の上に生
涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲所
とす。古人も多く旅に死せるあり。余も何れの年よりか片雲の風に

(一)江戸時代の俳人。俳聖と言はれる。元禄七年(一七〇〇)歿。奥の細道(一六八九年)著。更科紀行、鹿島紀行等の著者。外、句集がある。
(二)李白が春夜桃李園に宴する

(一)元禄元年(一七三四年)

道祖神

さそはれて、漂泊の思やまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋
に蜘蛛の古巢を拂ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關
越えんと、そゞる神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招にあひて、
取る物手につかず。股引の破を綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸す
うるより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が
別墅に移る。

草の戸もすみかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれる
ものから、富士の峰かすかに見えて、上野谷中(三)の花の梢、また何時か
はと心細し。睦ましき限りは宵より集ひて、船に乗りて送る千住と
いふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて、幻の巷に
離別の涙をそゞぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

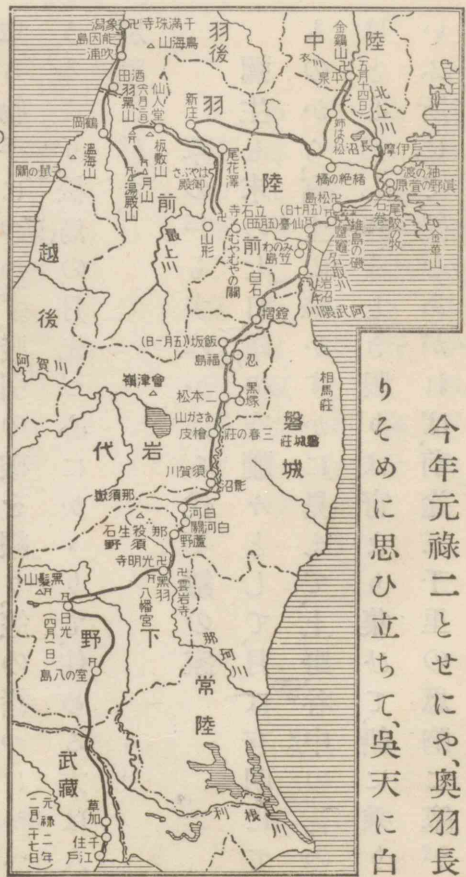
(三)今の上野公園から西北に續く地。
(四)東京市足立區もと奥州街道最初の宿驛

(二)鯉屋杉風。杉山氏。芭蕉の門人。江戸の年(享保十七年)歿。三十九年(一七三四年)別墅(江戸深川六間堀)にあつた。

(一) 埼玉縣北足立の宿 奥州街道

これを矢立の初として、行く道尙進まず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚唯かりそめに思ひ立ちて、吳天に白髮の恨を重ぬ



と雖も、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと、定めなき頼の末をかけ、その

日漸く草加といふ宿にたどり著きにけり。瘦骨の肩にかゝれる物先づ身を苦しむ。唯身すがらにといでたち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴衣、雨具、墨筆のたぐひ、あるはさり難き錢などしたるは、流石

(一) 「たよりあらばいかで都へついでやらんけふ白河の關は越えぬと一拾遺集 平兼盛

風騷の人

(二) 藤原清輔 第七十八代二條天皇の御代、大歌人。竹田の夫國行といふ者この關を過ぐるるとて服装を特に改めた事、清輔の著「袋草子」に見えてゐる。

(三) 磐梯山のこと

(四) 今福島縣磐城國田村郡の地方で、三春町が中心になつてゐる。

(五) 福島縣(岩代國)岩瀬郡、子石と須賀川との間にある新田。

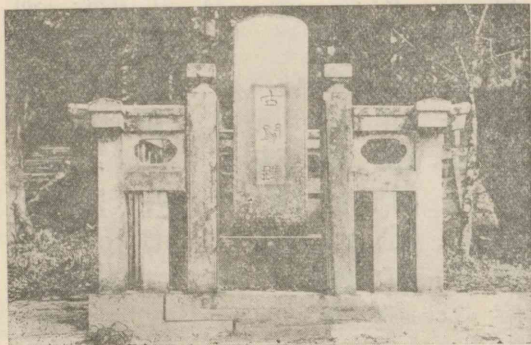
にうちすて難くて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

心もとなき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。いかで都へと便り求めしも理なり。中

にもこの關は風騷の人心を留む。秋風を耳に残し、紅葉を面影にして、青葉の梢猶哀なり。卯の花の白妙に、茨の花の咲添ひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、清輔の筆にも留め置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴著かな

曾良



白河の關の址

とかくして越えゆくまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津嶺高く、右に磐城、相馬、三春の莊、常陸、下野の地をさかひて、山連なる影沼とい

(一)同郡須賀川町
白河の東北二
六キロメートル
(二)姓は相良、名
は伊左衛門。
芭蕉の門人。
寶永二年(一七
三六五年)歿、
年七十八。

ことふりにた
れど
(三)支那湖南省の
北部にある大
湖。
(四)支那浙江省に
ある洞庭湖
と共に風光の
美を以て稱せ
られる。
(五)浙江省にある
一名錢塘江。
海嘯の奇を以
て知られてゐ

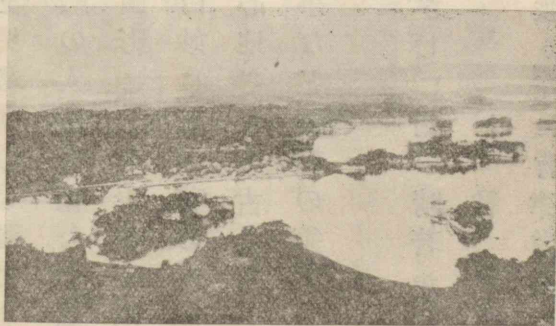
ふ所を行くに、今日は空曇りてもの影映らず。須賀川の驛に等躬と
いふ者を訪ねて、四五日とゞめらる。先づ白
河の關いかに越えつるやと問はる。長途の
苦しみ、身心疲れ、且は風景に魂奪はれ、懷舊
に腸を斷つて、はかしくしう思ひめぐらさ
ず。

風流のはじめや奥の田植歌

鹽釜の浦より船をかりて松島に渡る。そ

の間二里餘、雄島の磯に著く。

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の
好風にして、凡そ洞庭、西湖に恥ぢず。東南よ
り海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたゞふ。島々の數を盡して、峙
つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。あるは二重に重なり、三



松島

(一)山を掌る神

(二)禪僧、土佐の
人。萬治二年
(一七一九年)
歿、年七十八。

風雲の中に旅
寝す

(三)姓は山口、名
は信章。甲斐
の人。俳諧詩
に巧みであつ
た。芭蕉の友。
享保元年(一
七二六年)歿、
年七十五。
(四)醫者。芭蕉の
友人。江戸の

重に疊みて、左に別れ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛
するが如し。松の緑濃やかに、枝葉汐風に吹きたわめられて、屈曲自
ら矯めたるが如し。千早振神代の昔、大山祇のなせる業にや、造化の
天工、何れの人か筆を揮ひ、詞を盡さん。
雄島が磯は地續きて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、
坐禪石などあり。はた松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穂、松
毬などうち煙りたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知ら
れずながら、先づ懐かしく立寄る程に、月海に映りて、晝の眺また改
りぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寝すること、怪しきまで
妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす

曾良

余は口を閉ぢて、眠らんとしていねられず。舊庵を別る、時素堂
松島の詩あり。原安適松が浦島の和歌を贈らる。袋を解いて今宵の

(一) 姓は中川、美濃の門人。芭蕉

(二) 元禄二年五月、雉兔芻蕘

(三) 今宮城縣牡鹿郡石巻町

(四) 「すめろぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山にこがれ花さく」

(五) 同縣桃生郡橋浦村

(六) 牡鹿郡稻井村の字

(七) 同縣登米郡新田村

(八) 同縣登米郡沼田村

(九) 同縣登米町

(一〇) 藤原清衡、基衡、秀衡

(一一) 平泉館址、奥の御館

友とす。且杉風、濁子が發句あり。

七 奥の細道 その二

(二) 十二日、平泉へと志す。聞傳へたる姉齒の松、緒絶の橋など人跡稀に、雉兔芻蕘の行交ふ路、こともわかず。終に路ふみたがへて、石の巻といふ湊に出づ。黄金花咲く。詠みて奉りたる金華山海上に見わたされ、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、かまどの煙立續きたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿借らんとすれど、更に宿貸す人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、あくればまた知らぬ路迷ひ行く。袖の渡、尾駮の牧、眞野の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ所に一宿して、平泉に至る。

(三) 三代の榮耀一睡のうちにして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡

(一) 秀衡が作った平泉鎮護の山、富雄の金雞を山上に埋めた。
(二) 衣川館、義經の居館。
(三) 奥州北部の稱、盛岡市附近から北部にかけていふ。南部氏が奥州に封ぜられてから起つた名である。
(四) 泉三郎忠衡の居館。
(五) 杜甫が春望の詩の句。

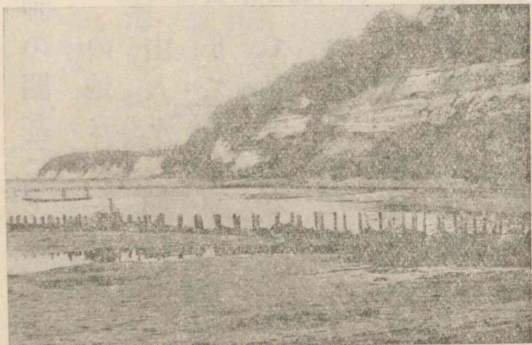
が跡は田野になりて、金雞山のみ形をのこす。先づ高館に上れば、北上川南部より流る、大河なり。衣川は泉が城を遶りて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたり。と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は

三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、

三尊の佛を安置す。七寶散失せて珠の屏風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新たに圍みて、いらかを



衣川遺址

(墓)

(一)今山形縣東村山郡山寺村にある俗に山寺といふ天台宗
 (二)天台宗延曆寺第二世の座主下野國の人貞觀六年(一〇二四年)寂年七十一(一〇七一年)
 (三)同縣北村山郡尾花澤町

覆ひて風雨を凌ぎ、暫く千歳の記念とはなれり。

五月雨のふりのこしてや光堂

山形領に立石寺といふ山寺あり慈覺大師の開基にて、殊に清閑



(筆岬龍谷蔦)堂光の雨

の地なり。一見すべき由人々の勸むるによりて、尾花澤よりとつて返す。その間七里許なり。日未だ暮れず、麓の坊に宿借り置きて、

山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢて物音聞えず。崖をめぐり岩をはうて佛閣を拜し、佳景寂寞として、心澄行くのみ覺ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

(一)今の山形市の邊を指したのであらう。
 (二)基點。今山形縣北村山郡西郷村の西。
 (三)準瀨。同郡大高根村の南。
 (四)同縣最上郡と東田川郡との境。海拔六三〇メートル。
 (五)今山形縣鮎海郡酒田町。
 (六)義經の臣常陸坊海存を祀る所といふ。
 (七)秋田縣由利郡鳥海山の西北麓。その海岸は、その文化四年(一〇四六年)鳥海山に噴火によつて埋没した。
 (八)能因法師が閑居の跡と言傳へる。

最上川はみちのくより出でて山形を水上とす。ごてん^(一)はやぶさ^(二)などいふ恐しき難所あり。板敷山の北を流れて、はては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船をおろす。これに稻積みたるをやいな船といふならし。白絲の瀧は青葉のひま^(三)に落ちて、仙人堂岸に臨みて立つ。水漲りて船危し。

五月雨を集めて早し最上川

江山水陸の風光數を盡して、今象瀉に方寸を責む。酒田の湊より東北の方山を越え、磯を傳ひ、いさごを踏みて、その間十里。日影や、傾く頃、汐風眞砂を吹上げ、雨朦朧として鳥海の山隠る。闇中に摸索して雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色また頼もしと、あまのときま屋に膝を容れて、雨の晴るゝを待つ。

その朝、天よく晴れて、朝日花やかにさし出づる程に、象瀉に舟を浮ぶ。先づ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向ふの岸

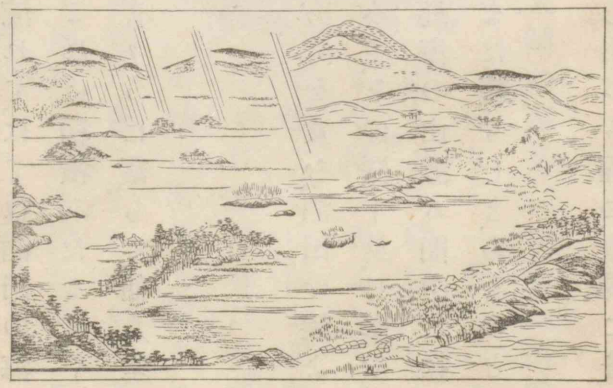
(一)「きさかたの櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつり舟」(西行法師)

(二)今宮城縣柴田郡笹谷峠の附近。また由利郡小砂川から飽海郡吹浦へ越える所。こは後者。
(三)今の秋田市。

にあがれば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。寺を干満珠寺といふ。この寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼のうちに盡きて、南に鳥海天を支へ、その影映りて江にあり。西はむや／＼の關路を限り、東に堤を築いて、秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて、浪うち入る、所を汐越といふ。江の縦横一里許、面影松島に通ひて、また異なり。松島は笑ふが如く、象潟は恨むが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

酒田のなごり日を重ねて、北陸道の雲に望み、遙々の思胸をいた



(載所傳詞繪翁蕉芭) 潟 象

(一)山形縣と新潟縣との境。
(二)市振。越後國に屬し、境川を隔てて、越中國に對する。

(三)歌人、國文學者。御歌所寄人、國學院大學教授。明治六年、福井市に生れた。四季の趣味の外、國文學に關する著がある。

長汀曲浦

吟腸を絞る

(四)萬葉集卷三に見える、高市黒人の歌。

ましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の關を越ゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國いちぶりの關に至る。この間九日、暑濕の勞に神を惱まし、病起りて事を記さず。
荒海や佐渡に横たふ天の川

八 旅と宿驛

鳥野 幸次

富士、燕の超特急で東海道六百キロメートルの道を八時間で走らせ、鳥より疾い飛行機で自由に天空を飛翔する如きは、古昔と言はず、私たちが幼時にさへ夢想だもしなかつた事であるが、それと同時に、長汀曲浦の旅の道に、馬を馳らせては雞聲を逐ひ、山館野亭の夜の宿に、日を重ねては吟腸を絞る往古の旅がいかなるものであつたかも、また今の人にはちよつと想像のつかぬ事であらう。
いづくにか我は宿らん高島の

(一) 萬葉集卷一に見え、忍坂部乙磨の歌

(二) 萬葉集卷三に見え、安貴王の歌

(三) 古今集卷二十に見え、東歌

(四) 唐代の詩人、温庭筠の商山早起の詩の句

(五) 江戸時代の俳人、大島斐太の句

勝野の原にこの日くれなば

(一) 大和こひいの寝らえぬに心なく

この洲の崎にたづ鳴くべしや

時には、旅情と郷愁とで遣瀨なさの極みに立つ事もあらうが、

(二) 伊勢の海の沖つ白波花にもが

つゝみて妹が家づとにせん

(三) をぐる崎みつの小島の人ならば

都のつとにいざといはましを

の如き大自然が到る所に展開して、旅人の心を極度に引きつける。

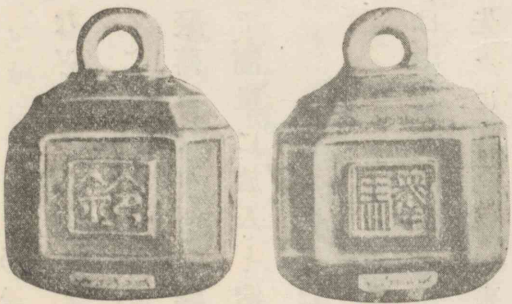
(四) 雞聲茅店の月。人跡板橋の霜。

この朝立のすがくしさを味はふ旅人はまた、

(五) 歌知らぬ旅人はなし春の風

で、長閑な春風の前には、悉く歌人となつて街道を練る。この快い美

(一) 第四十二代文
武天皇の大寶
元年(一三六
一年)に發布
された大寶令



鈴の路驛

しい印象は、何時までも詩篇となり、繪卷となつて、その人々の脳底にとゞまる。其所には旅の苦しみなどあつたものではない。これを思ふ時、昔の旅の懐かしさに、せめて五十三次だけでも歩いて見たいといふ氣になるのが常でもとはよく私たちが同人間の話題にも上つたものである。

所で、この旅行に最も重要な關係を有するものは宿舎である。令の制度では、三十里に一驛を置く事になつて居り、尙地形の便否によつて、この里程の伸縮はあつたにしても、大體は動かぬものであつた様だ。そして驛には驛長があり、驛子があり、驛馬を具備して官使の乗用に充てる。その使の驗に賜はつて携へるのが、いはゆる驛路の鈴で、

(一) 唐代の詩人杜荀鶴の秋夜宿江驛の句に宿るの詩句は和漢の詠集にも見えず

(二) 堀川百首下、關の題で詠んだ大江匡房の歌

(三) 萬葉集卷一に見える

(四) 紀伊國(和歌山縣)の牟婁温泉、今の西牟婁郡湯崎温泉であらう

(五) 一卷。作者菅原孝標の女の自敘傳ともいふべき日記で、十三歳より五十三歳までの生活が記されてある

漁舟の火影は寒くして波を焼き、驛路の鈴聲は夜山を過ぐ。

逢坂の關の關守いでて見よ

うまやづたひに鈴聞ゆなり

などでその物々しさが窺はれる。

この官使の宿泊する所は驛家であり、普通の旅人もやはりこの聚落をなす所の驛に宿舍を求めたものであらう。しかし、これだけで、簡単に旅人と宿舍との關係は語り盡きるものではない。

吾が背子はかりほつくらすかやなくば

小松がしたの草を刈らさね

は、中皇女命が紀伊の温泉にいでました時の御歌で、その御旅行の先々に假屋の出來た様が窺はれる。外にもこの類の歌は見えるが、これは驛制の完備しない上代のみの事でもなく、また王侯貴人の上のみにも限らない。更科日記の作者が、初瀬詣をする時には、往路

(一) 今の京都府(山城國)綾喜郡多賀村附近の地藏池がそれらしい

(二) 奈良の北方の坂

の一夜を贅野の池のあたりにあかした。その宿はいと怪しげなげすの小家であつたが、主人は、氣の知れぬ人を泊めて、釜ばしぬかれてはと、寝ずの番で一行を見守つたかと思へば、歸途に泊つた奈良坂のこなたの、これもいみじげな小家は、前と反對に、盗人の家であつたといふ。さてまた次の度の參詣には、類廣うて小家などには宿泊も出來ぬので、野中にかりそめの宿を作つて作者を据ゑ、従者たちは野宿をしたので、

草の上に行膝などを打敷きて、上にむしろを敷きて、いとほかなくて夜をあかす。頭もしとゞに露おく。曉方の月いといみじく澄みわたりて、よに知らずをかし。

と、いかにも面白さうに書いてはあるが、當座の難儀は容易ならぬ事であつたらう。これは寧ろ驛制の廢れた平安末の事で、受領階級の子女たちの近畿地方に於ける旅行の種々相を、最もよく知得る

(一)栗原信充の著
四卷。考證を
主とし、た。栗原
信充は、幕臣、原
野原。明治十三
年、明七十三
七年、明七十三

と共に、廣く他を類推する事も出来、旅の冠辭に「草枕」と措いた上代人の思想の、どこまでも續いた事が知られるのである。

また尙、古昔の旅行に伴なふ大きな不便と恐怖とは、糧食の携帯であり、盜賊の横行であつた。伊勢物語に「皆人かれないひの上に涙落してほとびにけり」と書いた「かれいひ」は、乾飯であり、糲ほしである。そして旅に糲を携へるのは、業平東下りの昔に限つた事ではない。柳菴りゅうあんの雜筆に據れば、

慶長頃の旅人、糲二合五勺を一日に充て、十日路を行くに二升五合をもたらし、驛舎に著きて湯をわかし、糲を食ひて寝るまでなりじ。されば湯の木の代四錢五錢を拂ひ、往來せしとなり。と見え、これが宿に木錢といひ木賃といふ事の出所である。盜賊に縁のある話は前にも書いたが、これは直ちに生命にも關する問題であるから、豫め出来るだけの防備をしておくのが、旅人

(一)卷三に見える。

(二)萬葉集代匠記
卷三。

(三)源氏物語、玉
葛の卷に見え
る。
頼もし人

(四)今の東京市芝
區三田臺町に
ある濟海寺が、
その跡といふ。

の常であつた。萬葉集に見える間人宿禰大浦の

天(一)の原ふりさけ見れば白眞弓

はりてかけたり夜路はよけん

の歌が、白眞弓を張りて天に懸けつれば、山賊などの恐なくして、今行く夜路はあしからじとなるべし。と言つた契沖説の當否は暫く別問題として、旅人が弓矢で護られた事は、源氏物語の玉葛(三)が初瀬參詣をする時に、その頼もし人なる豊後介が、弓矢持つた人を二人召具した事でも分り、更科日記に、

紫生ふと聞く野も、蘆荻のみ高く生ひて、馬に乗りて弓もたる末見えぬまで、高く生茂りて、中を分行くに、竹芝(四)といふ寺あり。と書いてあるのは、長途をかくる國司一族の上洛であるから、その行粧の嚴かな様も目に見える様である。

その物の本質の上から國訓に「うまや」と訓まれた驛は、何時しか

櫛の齒を挽く
如し

隔世の感

(一) 十返舎一九
本名は重田貞
一。江戸時代
府の戯作者。天保
二年(二) 四年九
十七年(二) 五
十七年(二) 五
歌川廣重。安
藤氏。江戸時
代の浮世繪師
で、風景に優
れた。東海道五
三次は殊に名
高。安政五年(一
八二五) 陰曆
水杯
陰曆



朝の旅 (筆塘翠瀨長)

の上り下りが、いかに美しいものであつたかは、想像以上であり、士庶人の來往もまた絡驛として、櫛の齒を挽く如くであつたらう。随つて驛路の整頓と、宿舍の完備と、前代に比しては、殆ど隔世の感があつたらう。そしてこの時代に於ける驛路なり宿舍なりの最も代表的なのが、東海道の五十三次で、その面影は、^(一)一九の膝栗毛や廣重の繪で窺知する事が出来る。けれども上代以來旅に附隨した不便と脅威とが、これです。全然なくなつたわけではないので、行く者は水杯をして別れ、残る者は陰膳



朝の旅 (筆塘翠瀨長)

「やどりの義のある宿とも稱せられ、續けて宿驛ともいふ様になつた。やどり」をも兼ねた上代の「うまや」は、だん／＼「うまや」の實を失つて、「やどり」を主とするに至つた。茲に名稱の變化が生ずる。けれども旅行に附物の人足や馬の次ぎかへが、この宿より外には、求めらるべくもない。其所に宿次の語が生れ、略しては次とも言はれた。そしてこの宿なり次なりが、形は變つても、永久にまた「うまや」の實を傳へる事となつた。
徳川の太平三百年、參勤交代の大小諸侯が、金紋先箱や鳥毛の槍を立てて

(一)小説家、名は録、綱、群、馬、縣の、人、昭、和、五、年、歿、年、六、十、五、田、舎、源、義、朝、殘、雪、袋、全、集、朝、花、袋、多、く、の、小、説、外、紀、行、隨、筆、の、著、が、あ、る、(二)隋、を、滅、し、て、高、祖、李、淵、の、建、て、た、國、で、哀、帝、に、至、る、ま、で、二、十、年、で、梁、に、滅、さ、れ、た、

を据ゑて、その平安を祈つたなども、維新前までは残存した風俗である。しかしながら、世の開化に趣くと共に、交通の整備と迅速とは人の豫想を超越して、驚くばかり進歩した。そして上代以来の様々な旅の風俗、習慣などは、今は懐かしい昔話として残るのみである。

九 北京から

田山花袋

唐から今に至る間には、支那にも色々な變遷があつたであらう。それはすぐれた歴史家でなければ、獨斷なしに言ふ事は出来ない程、複雑したものであつたであらう。けれども、しかも日本が朝鮮を中間に置いて、全くそのあらゆる物を模倣したといふ事は、輪郭的に臆氣には分つた。私は昔あつて今なくなつた日本の物を、其所にも此所にも發見する事が出来た。古い物語の中に書かれてある我が宮殿の様や、京都の町の工合や、城外の市場の様や、ばねのない荷

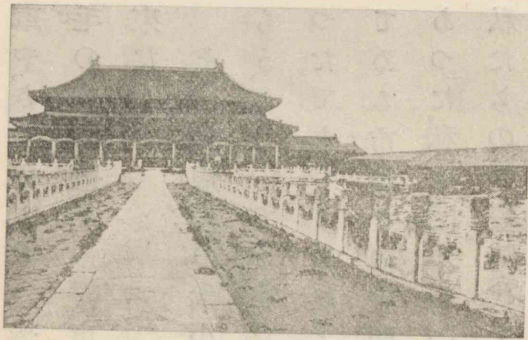
(一)支那河北省、今北平といふ。

(二)平安時代の女流歌人。越前守大江雅致の女。

車や、さういふ物は皆支那から移されて來たので、例の牛車や檳榔毛の車も、雕車や轎車の模倣であるといふ事が、ひとりでに分つて來た。

それは規模の大小はあつたであらう。結構の相違もあつたであらう。また、とても北京の宮殿の雄大と佳麗とは望む事は出来なかつたであらうけれども、今残つてゐる京都の皇居と、それに連なつてゐる市街との壯觀は、その時分の様を私に想像させるに十分であつた。私は門から門へ、宮殿から宮殿へと歩いて行きつゝ、絶えず私たちの平安時代を頭に浮べずにはゐられなかつた。私は其所に藤原道隆や道長がある様な氣がした和泉式部や紫式部がある様な氣がした。殿上人が笏を持つて威儀を正して、束帯を著て、靜かに天子の前に進んで行つてゐる様な氣がした。と同時に、その時代に於て、日本がいかに支那にその文明を開發されたかを思はずには

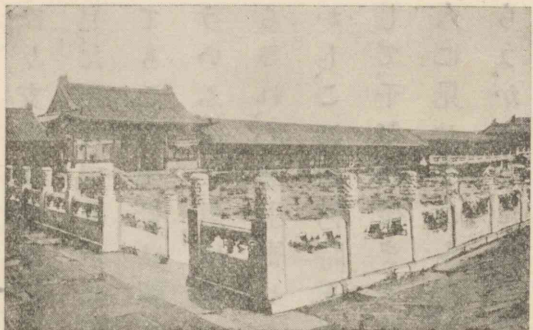
(一) 太祖奴爾哈赤が明を滅して、建てるに於て、宣統帝の國に、共和國となつた。その間、九十二年、二十七年。



(一のそ) 宮清乾内城禁紫

ゐられなかつた。少くとも當時の支那は、日本に取つて今のヨーロッパであつたに相違なかつた。續いて私はかういふ事を考へた。この今の北京の宮殿は、廢址——これから廢址にならうとする第一歩の光景であるといふ事を。今まで榮えてゐたものが漸く廢址にならうとするその最初の状態であるといふ事を。だから、私たちの様な單に見物の旅客には、雄大な規模だとか、流石は支那の宮殿だとか、かうした物はどこにもあるまい、外國にもあるまいとか、あの黄色い瓦の美しさはどうだとか、すべてさういふ風に外面的に、また無關心に見られるであらうけれども、支那人に取つては——寧ろ、清朝の遺臣

(一) 今の河南省南の洛陽に、古代の洛陽の地盤を、漢から改められた。



(二のそ) 宮清乾内城禁紫

などに取つては、奈良朝の詩人が奈良の都の衰へて跡になつて行つたのを歎いたより、より以上に感慨無量であらねばならぬのであつた。私はじつと立ち盡して、あたりを眺めた。私はこの宮殿が全く亡くなつてしまつて、洛陽乃至長安の様に、單にその位置だけが指點される様になる時の事を頭に浮べた。

奈良や平泉やローマに限らず、廢址にならうとする最初には、どこでも必ず北京の宮殿乃至は天壇の様な光景を呈するのであらうと私は考へた。私は深く人生興亡の事を頭に繰返さずにはゐられなかつた。私は大きな美しい殿堂から殿堂へと歩いて行く花崗石の鋪道の石の隙間から草の生えてゐる

のを、何とも言はれない心持で眺めた。少くとも今はまだ美しい。観覽する者の眼を見はらせずにはおかない程美しい。あの黄色いいらかの日に映じてゐる様は……あの金色の額や屋角の的躰としてあたり輝いてゐる様は……やはり支那は大きい。地形が大きいだけそれだけ大きい。この宮殿を見ただけでも、その雄大佳麗なのに壓倒される。外國に行つても、とてもこの光景は認め得られまい。其所に行つた者は、誰でもさういふ風に思はずにはゐられないであらう。條件なしに眼を見はらされ、心を引寄せられ、感歎の聲を餘儀なくさせられるだらう。しかし、これが何時まで残るだらうか。民國政府はこれを十分に保護して、千年の後まで保存させるであらうか。否、今でさへ金を取つて人に見せてゐるくらゐだから、とてもさういふ事は望まれないだらう。かうした光景のこのまゝ保存されるのは、百年もむづかしい

(一) 中華民國の政
府。

かも知れない。或は洛陽や長安の様になるかも知れないけれども、とにかく今の光景は全く亡くなつてしまふであらう。私は單に遊覽者の心持でそれを眺めてゐる事は出来ない様な気がした。それに比べて私たちは幸福だといふ。私は思つた。奈良の廢墟が今でもはつきり残つて居り、大極殿や龍尾道の所在もそれと指ざされ、その周圍にある、北京で言へば、西山(三)と言つた様な所にある古い寺には、優秀な佛像が依然として残つてゐるといふ事は、これは萬世一系のお蔭ではないか。内亂にも外寇にも壞されなかつた私たちの皇室の有難さではないか。私はそれに對して深い誇と有難さを感じずにはゐられなかつた。私はまた大きな丹塗(二)の丸柱の立つてゐる殿堂の中を、無限の感慨に滿されながら、それからそれへと歩いて行つた。

—海をこえて—

(一) 古、八省院の
正中にあつて
天皇の朝政を
正、即位は賀
見、または賀
大禮を行はせ
られた正殿。
(二) 古、大極殿の
前庭にあつた
階段。
(三) 元の京兆宛平
縣の西にある。
燕京八景の一。

一〇 源三位

抑、この源三位入道頼政は、攝津守頼光に五代、三河守頼綱が孫、兵庫頭仲政が子なりけり。保元の合戦の時も御方にて先を駆けたりしかども、させる賞にもあづからず、また平治の逆亂にも、既に親類を捨てて参じたりしかども、恩賞これおろそかなりき。大内の守護にて年久しうありしかども、昇殿をばゆるされず。年たけ齡傾いて後、述懐の和歌一首詠みてこそ昇殿をばしたりけれ。

人知れぬおほうち山の山守は

木がくれてのみ月を見るかな

これに依つて昇殿をゆるされ、正下、四位にて暫くありしが、尙三位を心にかけて、

のぼるべきたよりなき身は木のもとに

しひをひろひて世をわたるかな
さてこそ三位はしたりけれ、やがて出家して、源三位入道頼政とて、今年七十五にぞなられる。

一期
第七十六代近衛天皇

この人一期の高名と思しき事は多きが中にも、殊には仁平の比ほひ、近衛院御在位の御時、夜な／＼おびえさせ給ふ事ありけり。有驗の高僧、貴僧に仰せて、大法、祕法を修せられけれども、その驗なし。御惱は丑の刻ばかりの事なるに、東三條の森の方より黒雲の一叢立來つて、御殿の上に蔽へば、必ずおびえさせ給ひけり。これに依つて公卿僉議ありけり。去んぬる寛治の比ほひ、堀川院御在位の御時、主上しかの如くおびえたまざらせ給ひけり。その時の將軍義家朝臣、南殿の大床に候はれけるが、御惱の刻限に及びて鳴弦する事三たびの後、高聲に、前の陸奥國守源義家、と名のりたりければ、聞く人身の毛よだつて、御惱必ず怠らせ給ひけり。然れば則ち先例に任せ

第七十三代堀河天皇

て、武士に仰せて警護あるべしとて、源平兩家のつはものうちを
 選ませられけるに、この頼政をぞ選み出されたりける。その時は未
 だ兵庫頭にて候はれけるが、申されけるは、昔より朝家に武士を置
 かるゝ事は、逆反の者を退け、違敕の輩を滅さんが爲なり。目にも見
 えぬ變化の物仕れと仰せ下さるゝ事未だ承り及ばず。と申しなが
 ら、敕宣なれば召に應じて參内す。頼政、頼みきつたる郎等、遠江國の
 住人猪早太に、母衣の風切はいだりける矢負はせて、唯一人ぞ具し
 たりける。我が身は二重の狩衣に、山鳥の尾をもてはいだりける。鋒
 矢二筋、滋籐の弓に取添へて、南殿の大床に伺候す。頼政、矢二つ手挾
 みける事は、雅頼卿その時は未だ左少辨にておはしけるが、變化の
 物仕らんずる仁は頼政ぞ候らん。と選み申されたる間、一の矢にて
 變化の物射損ずる程ならば、二の矢には雅頼辨のしや頸の骨を射
 んとなり。案の如く日比人の申すにたがはず、御惱の刻限に及んで、

〔雅兼の子、中納言正三位〕

東三條の森の方より、黒雲一叢立來つて、御殿の上になびいたり。



源三位頼政(高嵩谷筆)

頼政きつと見上げたれば、雲の中に怪し
 き物の姿あり。射損ずる程ならば、世にあ
 るべしとも覺えず。さりながら矢取つて
 番ひ、南無八幡大菩薩。と心のうちに祈念
 して、よつ引いてひやうと放つ。手答して
 はたと中る。得たりやおう。と、矢叫をこそ
 してんげれ。猪早太つと寄り、落つる所を
 取つて押へ、柄も拳も透れ。と、續け様
 に九刀ぞ刺したりける。その時上下手ん
 手に火を點して、これを御覽じ見給ふに、

頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎の如くにして、鳴く聲ぬえにぞ似たりける。怖しなども愚かなり。主上御感の餘りに、獅子王と申す御劍

(一)藤原頼長

を下さる。宇治の左大臣殿これを賜はりついで頼政に賜はんとて、御前の階を半ばばかりおりさせ給ふをりしも、頃は卯月十日餘りの事なれば、雲居に杜鵑二聲三聲音づれて通りければ、左大臣殿

ほとゝぎす名をも雲居にあぐるかな

と仰せられかけたりければ、頼政右の膝を突き、左の袖を廣げて、月を少しそば目にかけてつゝ、

弓張月のいるにまかせて

と仕り、御劍を賜はりて罷り出づ。この頼政卿は武藝にも限らず、歌道にもまた勝れたりとぞ、時の人々感じあはれける。さてかの變化の物をば、うつぼ船に入れて流されけるとぞ聞えし。

また應保の比ほひ、二條院御在位の御時、ぬえといふ化鳥禁中に鳴いて、屢宸襟を惱まし奉る事ありけり。然れば先例に任せて、頼政をぞ召されける。頃は五月二十日餘り、まだ宵の事なるに、ぬえ唯一

(二)第七十八代二條天皇

かづく

(一)權大納言藤原實能の子

(二)支那春秋時代の楚の有名な射術の名人

聲音づれて、二聲とも鳴かざりけり。目ざすとも知らぬ闇ではあり、姿形も見えざりければ、矢つぼをいづくとも定め難し。頼政が謀に、先づ大鏑取つて番ひ、ぬえの聲したりける内裏の上へぞ射上げた。ぬえ、鏑の音に驚いて、虚空にしばしぞひらめいたる。次に小鏑取つて番ひ、ひいふつと射切つて、ぬえと並べて前にぞ落したる。禁中さゝめきわたつて、頼政に御衣をかつけさせおはします。今度は大炊御門の右大臣公能公これを賜はりついで、頼政にかづけさせ給ふとて、昔の養由は雲の外の雁を射き、今の頼政は雨の中のぬえを射たり。とぞ感ぜられける。

五月やみ名をあらはせる今宵かな

と仰せられかけたりければ、頼政

たそがれ時もすぎぬとおもふに

と仕り、御衣を肩に掛けて罷り出づ。その後伊豆國賜はり、子息仲綱

(一)今京都府中郡五箇村。
(二)今福井縣遠敷郡宮川村。

(三)字は孟德、勢を得て魏の國王となつた。後漢の獻帝の建安二十五年(西紀二二〇年)歿。

(四)曹操の短歌行の詩句。
(五)頼光の弟、武勇の將。永承三年(一七〇八年)歿、年八十一。

(六)「吹く風をなへども道もせに散る山櫻かな」

(七)岩手縣膽澤郡衣川村。
情致
趣。おくゆかしい

受領になし、我が身三位して、丹波の五箇の庄、若狭の東宮川^(一)を知行して、さておはすべかりし人の、よしなき謀叛起いて、宮をも失ひ参らせ、我が身も子孫も滅びぬるこそうたてけれ。 — 平家物語 —

自修文

文學と氣品

文學といふものは、人間界の飾であり、國家の誇であつて、個人から見れば、高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國は、その國の品格も一段と高く見え、文學の嗜がある偉人は、一入懐かしい心持がする。魏の曹操はその事功の上から見ても、餘り好かれぬ人物であるが、槊を横たへて、月明らかに星希に」と歌つた一事を想ひ出すと、何となく慕はしくなつて來る。
源頼光や頼信よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるのは、勿來關に馬を停めて、道もせに散る山櫻かな」と詠んだ風流、衣川に矢を番へて、衣のたてはほころびにけり」と呼止めた情致が

(一)「埋木の花さきりしにのみなかるはてぞあはれなりける」
韻事
風流な事なら、
(二)「とても世になからふべくもあらぬ身のかりの契をいかで結ばん」
(三)清盛の父、鳥羽上皇に群遇卿にされたが、豊明の節を取立てて辱しめられた。
(四)「有明の月もあかしの浦風に波ばかりこそよると見えしか」
(五)平清盛。
(六)「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ書きつづくよつばの石ぶみ」
義祖
先祖。

ある爲で、これはその後の爲義にも、爲朝にも、義朝、義平にも眞似の出來ぬ所。源三位頼政の「しひを拾ひて世を渡るかな」は餘り感心せぬが、弓張月のいるに任せて「埋木の花さきくこともなかりしに」などの韻事があつた爲に、後世にまでその名が高くなつたのであらう。小楠公をして一層美的ならしめるのは、かりの契をいかで結ばんの歌と、梓弓なき數にいるの辭世とである。平忠盛に波ばかりこそよると見えしかの風流があつて、砂の俄殿上人も、優に優しい感じを與へる。これは淨海入道の及ぶ所ではない。頼朝の陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬを思へば、義經や範頼を殺す程の人とは思はれぬ。西行法師との談話にも、幾分の風流談が混つてゐたらうと想像される。

その子實朝に至つては更に歌の名手。これは源氏の武將中の第一で、義祖八幡太郎の文學的方面は、茲に最大な發達を遂げてゐる。頼朝の霸業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽であ

覇業 諸侯の首領たる事業
末路 死したる事

(一) 忠盛の子。一の谷の戦に討死した。

公達 親王、攝家、清華等の貴族の子弟

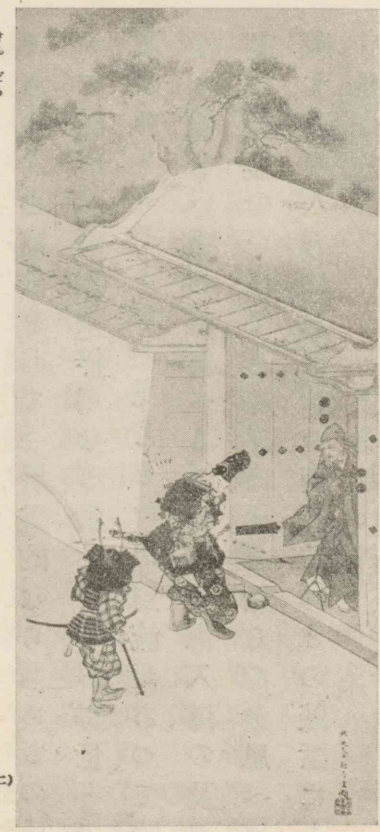
(二) 壽永二年七月、源義仲に京師に逼られて、平家は安徳天皇を奉じて西奔した。

語草 話のたれ。家訓のたれ。

院宣 院中の有司が院旨を奉じて下知する文書

(一) 文祿三年(二二五四年)二月二十五日、秀次、家康、前田利家等と吉野に赴いて花

る。文學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面の人で風流談のあるのは、非常にその人品を高くするもので、時にはその人の缺點まで掩ふ様な心持がする。



平忠度 實朝が源氏の末路を飾ると同じ様に、平家の末路を飾る者は忠度である。平家の

公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乗返し、俊成卿の門を叩いた一話は、最も麗しい永久な語草である。武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜がなくてはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事がらである。そ

見をした。 (二) 九月十三日の詩句

襟度 襟のうちの量を容れる度

(三) 上杉謙信の近侍。後家康に封ぜられた。元和五年(二七九年)歿、年六十

風采 人がら。人から。思想 思ひ慕ふこと。典型 型

(四) 名は彪。水戸藩士。安政二年(二五一年)歿、年五十

(五) 名は源次郎。若狭の人。安政六年(二五一年)歿、年四十四

(六) 訣別の詩句

れであるから、戦國時代にも風流の心得のある武人が随分多かつた。承久の役に院宣を読み得る人がなかつたなどといふのは、眞の武士のなかつた證據。北條氏康、毛利元就、太田道灌などは皆和歌風流の嗜が深かつた。豊臣秀吉を無風流な人と思ふのは大間違。吉野の花見には諸大名もまたそれ〴〵詠歌をもものしてゐる。上杉謙信が霜は軍營に満ちの詩吟は、人をして先づこれに同情せしめる所以で、その襟度の遙かに武田信玄以上だと思はしめる最大原因である。その家來の直江兼續も、文學の素養からその風采を想望せしめる。多くの傳説を集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳はらないのは、何となく物足らない心地がする。梶原景時、明智光秀の時にとつての連歌などが、稍その憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。幕末の志士は必ず何物かを口吟んでゐる。藤田東湖の回天詩や正氣歌などはその尤なるもので、梅田雲濱の妻は病牀に臥し

(一)名は綱記。越前藩士。安政六年斬られた。年二十七。
 (二)名は醇。山陽の第三子。安政六年斬られた。年三十五。
 (三)名は啓。信濃松代藩士。元治四年(二五)に斬られた。年五十四。
 (四)名は寅次郎。長州萩藩士。安政六年斬られた。年二十九。
 (五)京都清水寺の僧。安政五年薩摩灣に入水。年四十六。
 (六)通稱六郎。攝津の人。元治元年刑死。年五十二。
 (七)野村もと。慶應三年(二五)六十二年)寂年

兒は飢に叫ぶ。を初め、橋本景岳^(一)でも、頼三樹三郎^(二)でも、佐久間象山^(三)でも、吉田松陰^(四)でも、僧月照^(五)でも、伴林光平^(六)でも、乃至は望東尼^(七)でも、或は詩に、或は歌に、その心事は永くその文學に傳はつて、忘れようとしても忘れられない様になつてゐる。これ等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人。その志を繼いだ人々が、却つて明治の世には公となり、侯となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一片の詩、一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古、人の情緒を動かすであらう。

一一 小松内府 その一

太政入道は斯様に人々數多縛め置きても、尙心ゆかずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に、黒絲をどしの腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島大明神よりうつゝに賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常

(八)太政大臣平清盛。入道して淨海と稱した。ゆゑし

(一)清盛の叔父忠正。
 (二)崇徳上皇。
 (三)崇徳院の第一皇子重仁親王。
 (四)清盛の父忠盛。
 (五)鳥羽法皇。
 (六)一八一九年。
 (七)藤原信賴。
 (八)源義朝。
 (九)藤原經宗。
 (一〇)藤原惟方。
 (一一)藤原成親。

の枕を放たず立てられしを脇に挟み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。

「貞能」と召す。筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋をどしの鎧著て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、この事いかが思ふぞ。保元に平右馬助を始めとして、一門半ば過ぎて新院の御方に参りにき。一の宮の御事は、故刑部卿の殿の養君にてましまししかば、かたゞ見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠^(一)に任せて、御方にて先を駆けたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、月信賴、義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内に立籠り、天下暗闇となつたりしにも、入道隨分身を捨てて兇徒を追落し、經宗、惟方を召縛めしに至るまで、君の御爲に既に命を失はんとする事たびたびに及ぶ。されば人何と申すとも、いかでこの一門をば七代までは思し召し棄てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづら者

(一)藤原師光、入道して西光と言つた。

讒奏

(二)後白河法皇

(三)平重盛の邸

(四)鳥羽、後白河
兩法皇の離宮
今の京都市東
山區三十三間
山の東南

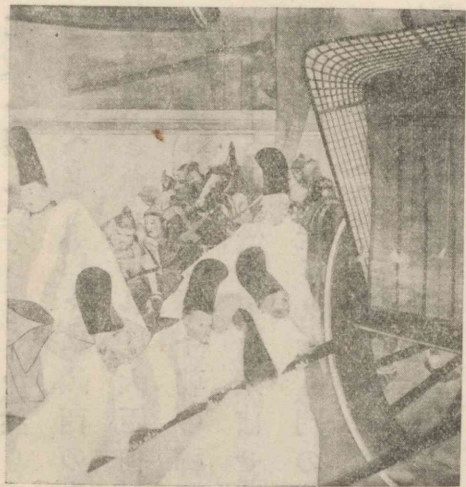
西光と申す下賤の不當人が申す事に君のつかせ給ひて、やゝもす
ればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからね。この後も
讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵と
なつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めん程、法皇を
ば鳥羽の北殿へ移し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし
参らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の者共がうち
より、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍共にふるべし。大方
は入道院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。著背長取出せ。と
こそ宣ひけれ。主馬判官盛國、急ぎ小松殿へ馳参つて、世ははやかう
候。と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、嗚呼、はや成親卿の首の刎
ねられたんな。と宣へば、その儀にては候はねども、入道殿の御著背
長を召され候上は、侍共も皆うち立つて、只今院の御所法住寺殿へ
寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の

禪門

(一)清盛の邸

さやめく

北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせう
とは候へども、内々は鎮西の方へ流し参らせんところ議せられ候
ひつれ。と申しければ、大臣、何によつて只今さる事のおはすべきと
は思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂ほしき事もやおは
すらんとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。
門前にて車よりおり、門の内へさし入りて見給ふに、入道腹巻を
著給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各色々の直垂に思ひくゝの鎧著
て、中門の廊に二行に著せられたり。その外、諸國の受領、衛府、諸司な
どは縁にゐこぼれ、庭にもひしと並みゐたり。旗竿など引側めく、
馬の腹帯を固め、冑の緒を締め、只今皆うち立たんずる氣色ともな
るに、小松殿、烏帽子直衣に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り
給へば、殊の外にぞ見えられける。
入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうする様にふるま



(筆湖廣橋高) 盛重府内松小

ふものかな。大きに諫めばやと思はれけれども、流石子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を著て向はん事、流石面はゆう恥づかしうや思はれけん、障子を少し引立て、腹巻の上に素絹の衣を、あわて著に著給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えける

を隠さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上に著き給ふ。入道宣ひ出さるゝ事もなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

一二 小松内府 その二
稍あつて入道宣ひけるは、あの



(筆湖廣橋高) 盛重府内松小

にやいかに。とあきれ給へば、稍あつて大臣涙を抑へて、この仰承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず悪事を思ひ立ち候なり。また御有様を見参らせ候に、更に現とも覺えず候。流石我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしよ

破戒無慚

(一)詩經。
(二)支那山西省永濟縣の南にある。

蓮府
槐門
進此

りこの方、太政大臣の官に至る人の、甲冑をよろふ事、禮儀を背くに
あらずや。就中御出家の御身なるに、法衣を脱捨てて、忽ちに甲冑を
よろひ、弓箭を帶じましまさん事、内には破戒無慚の罪を招くのみ
ならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。かたふ、恐あ
る申事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきにも候はず。先づ世
に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、これなり。その中に
最も重きは朝恩なり。普天の下王地にあらずといふ事なし。されば
かの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山にわらびを折りし賢人も、救命の
背き難き禮儀をば存知すところ承れ。いかに況や、先祖にも未だ聞
かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。いはゆる重盛が無才愚暗の身
を以て蓮府槐門の位に至る。しかのみならず、國郡半ばは一門の所
領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。
今これ等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、みだりがはし

哀憐
佛陀の冥慮

く法皇を傾け参らせ給はん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背か
せ給ひ候ひなんず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべか
らず。この一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮めし事は無
雙の忠なれども、その賞に誇る事は、傍若無人とも申しつべし。然れ
ども當家の運命未だ盡きざるに依つて、事既に露れ候ひぬ。その上
仰せあはせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる
不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行
はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈
奉公の忠勤を盡し、民の爲には益撫育の哀憐を致させ給はば、神明
の加護にあづかつて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明、佛陀感應あ
らば、君も思し召し直す事などか候はざるべき。
これは尤も君の御ことわりにて候へば、かなはざらんまでも、院
中を守護し参らせ候べし。その故は、重盛はじめ敍爵より今大臣の

大將に至るまでしかしながら君の御恩ならずと言ふ事なし。その恩の重き事を思へば、千顆萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずれば、一入再入の紅にも尙過ぎたらん。然らば院中に参り籠り候べし。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の巔よりも尙高き父の恩忽ちに忘れんとす。傷ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲には既に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷れり、是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、唯重盛が首を召され候へ。その故は、院参の御供をも仕るべからず、また院中をも守護し参らすべからず。富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、かたゝ極めさせ給ひぬれば、御運の盡きん事難かるべきにあらず。富貴の家には、祿位重疊せり、二たび實なる木は、その根必ずいたむと見えて候。心細くこそ候へ。何時までか命生きて亂れん世をも見候べき。唯末代に生を受けて、かゝる憂目に逢ひ候

重盛が果報の程こそ拙う候へ。只今も侍一人に仰せ附けられ、御つぼの中へ引出されて、重盛が頭を刎ねられんずる事は、いと易い程の御事でこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ。とて、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめくと泣き給へば、その座に並み給へる平家一門の人々、皆袖をぞぬらされける。 — 平家物語 —

一三 平家物語論

五十嵐 力

長き平安朝の公卿文明は、一旦清盛に滅されたが、その亡魂は平家に魅入つて辛うじて蘇り、再び二十年の果敢ない華やかな夢を見た。奢る平家はかくて藤原氏に得た所によつて滅び、世になし源氏はその平家の失つたものを得て興つた。この二者得喪の關係を骨として、平家の榮華没落の樂しさ、悲しさを寫した物が平家物語である。平家が歴史の表舞臺を占めた、保元より壽永までの三十年

(一) 國文學者、文學博士。早稲田大學教授。明治七年山形縣に生れた。形新文章講話、國歌の胎生及物語研究等の著がある。

(二) 後白河天皇より安徳天皇まで一八四三年

(一) 秦の依臣、始皇の死後、始皇の専らにしがた。三世皇帝の時歿した。西紀前二〇七年。
(二) 漢の逆臣、前漢の帝位を奪つて國を新と號した。劉秀が滅された。西紀後二三年。在位十五年。
(三) 唐の反將、玄宗の反將。玄宗の起した。大亂を起した。西紀七五七年歿。

間、——この三十年間に於ける空前絶後ともいふべき平家の榮華と没落とは、いかにこの物語に描かれたか。

先づ序幕は、祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。驕れる者久しからず、唯春の夜の夢の如し。猛き者も遂には亡びぬ、偏に風の前の塵に同じ。といふ物悲しげな、面の華やかさを哀愁の情調で裏うちした様な口調、文體、趣味、すべての點に於て、「平家」一篇の代表とも見える文句を以て始つてゐる。此所へ漢土の趙高、王莽、安祿山、本朝の將門、純友等を前驅として堂々と現れ出たのが六波羅の入道、前の太政大臣平の朝臣清盛で、いはゆる「心も言葉も及ばれぬ」彼の驕奢横暴が、先づ小氣味よく描かれてある。彼は本來、殿上の交をだに嫌はれた者の子である。かの西光が彼を罵つて、抑、御邊は故刑部の卿忠盛の嫡子にておはせしが、十四五までは出仕もし給はず、故中御門の藤中納言家成卿

の邊に立入り給ひしをば、京童は例の高平太とこそ言ひしか」と言つた通り、はかなき中納言家に立入るをすら面目とした程の身分であつたが、それが運命の後押で、一躍して太政大臣となつた。世に清盛程幸運な者はあるまい。

彼には格別の武略があるわけではない。保元には爲朝の銳鋒を避けて弱敵に向ひ、平治には冑を後向にかぶつた程のあわて者でありながら、不思議に吉事のみうち續いて、身は臺閣の高きに上つたのみならず、彼の惡運の強さは、五十一歳の時大病に罹つて、存命の爲に出家したが、それと共に病は立所に癒えて、天命を全うした。そしてその病癒えて後の彼の半生は、殆ど横紙破のわがま、に費されたのである。

治に居て亂を忘るゝは人の常である。まして言ふ事は皆行はれ、なす事は悉く従はれるといふ彼の世盛の段になれば、もはや武を

練る必要がない。かゝる時に、必然に人心を壓して起るものは、遊惰安逸の慾である。是に於て、感情、文藝を主とした平安朝の公卿文明は、今や赫灼の光を放つて彼等の眼に映じた。彼等は甲冑を脱して綾羅錦繡を身に纏うた。烏帽子のため様、衣紋のかき様に風雅を競ふ事となつた。かくて朝廷樞要の顯職、多くは平族の占むる所となり、一門の公卿十六人、殿上人三十餘人、諸國の受領、衛府、諸司、都合六十餘人の多きに至つた。その外、清盛の女八人、皆とり／＼に榮え、或は召されて女御となり、或は后に立つて國母として院號を蒙らせらるゝに至つた。

しかしながら、この威勢も、得意も、驕奢も、皆一場の夢であつた。公卿のもつ宮廷文明が見る間に、彼等を軟化し、やがて平家の一門は、政治を知らぬ大臣、納言と、武事に習はぬ大將、中將、戰爭を忘れて主人の奢侈風流の手助をする家子、郎黨とを以て満された。かくして

(一)平經正が恩賜の琵琶を仁和寺にお返し申した事言ふ。
(二)平忠度が藤原俊成を訪れたこと。
(三)清盛の子、武勇の名高く、平清盛の弟、平治の亂で名をあげ、平永四年自殺した年五十七。
(四)清盛の子、能登守、壇ノ浦の戰に義經と一騎打をした事。
(五)平治四年(一八四〇年)平維盛が頼朝を討つて富土川で破れた事。

身方とは離れ、合戰の期には違つても、手^(一)すさびの樂器は失ふまいとする貴公子を生じた。一門の運命の爲に自重すべき^(二)可惜^(三)身命^(四)を、甘んじて歌友^(五)だちの訪問に賭する武將を生じた。一門の氣風のかくなる上は、知盛^(六)、教盛^(七)、教經^(八)、景清等二三の除外例者の憤激ももう及ばぬ。かくして一世を聳動した平家の榮華は、重盛の哀死、清盛の憤死を境とし、富士川水禽の羽音を轉機として、幻の如くに消え、一門の運命は急轉直下、都を追はれ、一ノ谷を追はれて、やがて西海の波と消えた。蓋し重盛の聰明盛徳もその家運の維持に寸效がなかつたのみならず、彼も武力養成の必要には全く著眼せず、一門の文弱を矯めようとする考はなかつたのである。否、彼自ら富貴、榮華、朝恩、重職を極める事を無上の榮譽として喜んだのである。賢明なる彼も、つまりは時代の波に漂つた一人で、聰明忠誠なる君子人の彼の苦心が、偶、平家の滅亡を早くする原因となつたのも、不測の天意を

(一) 京都の白拍子
清盛に召され
て西八條の邸
に出たが、時
に年二十一
に成親等と平氏
を滅さすとし
て果さず、治
承元年(一八
三七年)鬼界
壱ヶ島に流され
翌年歿した
年三十七
ねび

暗示して、この物語に一層の哀さを添へてゐる。
この平家の一門の榮枯の、華々しい、目覺しい激變は、平家物語の脊梁をなして、この物語に稀有の興味と情調とを與へてゐるが、その間には、更に平家の運命を壓縮した様な幾多の哀な挿話があつて、本筋を引立たせてゐる。祇王も、西光も、成親も、俊寛も、義仲も、判官義經も、皆その小縮圖であつて、平家はこれ等を基礎とし、背景とし、添景として、更に大規模に人生の悲哀を歌つた物である。而してこれ等の小話を踏まへて、平家物語の描き出した悲哀の最高調は、實に二位の尼主上を抱いて入水する一節にある。主上今年は八歳にぞならせおはします。御年の程よりは遙かにねびさせ給ひて、御かたちいづくしう、あたりも照輝くばかりなり。御髮黒うゆらくと御背中過ぎさせ給ひけり。主上をすかし參らせて、「この國は粟散邊土と申して、物憂き境にて候。あの波の下にこそ、極樂淨土とてめで

分段

たき都の候へ。それへ具し參らせ候。」と、様々に慰め參らせしかば、山鳩色の御衣にびんづら結はせ給ひて、御涙におぼれ、小さう美しき御手を合せ、先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮、正八幡宮に御暇申させおはします。その後西に向はせ給ひて、御念佛ありしかば、二位殿やがて抱き參らせて、「波の底にも都の候ぞ。」と慰め參らせて、千尋の底にぞ沈み給ふ。悲しきかなや無常の春の風、忽ちに花の御姿を散し、いたまじきかな分段の荒き波、玉體を沈め奉る。」と。何等の哀音ぞ。厭はせ給ふ幼帝を、色々にこしらへ慰め參らせて、抱き奉りて海中に躍り入る。千尋の底に沈み給ふ。の一句、王者の音もなく沈み行かるゝ御有様を、まのあたり見奉る如くである。海底に達せられた刹那、地底天上より世を壓して殷々と響き始めた哀歌は、悲しきかなや無情の春の風以下の数句で、この哀歌と共に、平家と平安朝の舊文明とは永久に亡び去つた。祇園精舎の鐘の聲の序曲は層々歩

を進めて、此所に最高調に達し、而してこの哀絶の物語は、この最後の調子を一層悲壯にせんが爲に、此所に神璽と寶劍と幼帝とを奪ひ去つたのである。我が國古來、未だ曾てこの如き悲壯の曲はない。而してこの最高調の哀歌は長く尾を曳いて、大原御幸にその餘韻を収めてゐるのである。

見よ、唯一人大原の奥に世を遁れて、昔は先づ東に向はせ給ひて、伊勢大神宮、正八幡宮伏し拜ませおはしまし、天子寶算千秋萬歳とこそ祈り申させ給ひしに、今は引きかへて、西に向はせ給ひて、過去精靈必ず一佛土へと祈らせ給ふ、哀ふかき女院の、御庵室の御障子にあそばされた御歌を。

この頃はいつならひてかわが心

大宮人のこひしかるらん

天上の樂しみも地獄の苦しみも、今は回顧の眼に靜かに寂しく

映る様になつた。この時に至つても、そゞろにこひしきは、大宮人の生活である。もとは武人の女たる御身の、何時ならひてか、宮廷の公卿生活のこひしくなつた事であらう。あはれ女院の御心は平家一門の心であつた。彼等は何時しか公卿の生活に中毒して、甘んじてその犠牲となり、死に至るまで公卿生活の甘き夢に憧れてゐた。平家の歴史は寂しいけれども、甘い、悲痛だけれども、酔心地の歴史である。稀有の悲劇だけれども、恍惚として夢心地に味はひ得る悲劇である。而してこの悲劇の樞要部を占めて、壯快な前曲を奏でたのが清盛、結尾の哀音を奏でたのが清盛の妻二位の局、而して最後にこの哀音の餘韻の搖曳を奏でて、この作に千鈞の寂しき落著を與へたのが清盛の女なる女院である。

(新國文學史に據る)

(一)内藤林右衛門もと尾州犬山門に入り、後禪門に入つた。蕉門に習ひ、蕉門永元(二)三十四年)寂。六十四年(二)三十四年)寂。大島陽喬、俳人。江月の人。天明七年(二)一七九七年)寂。上島治房、俳人。攝津の人。元文三年(二)一七八三年)寂。元文三年(二)一七八三年)寂。炭氏、俳人。江月の人。和八年(二)一七九八年)寂。三十一(二)一七九一年)寂。六十三(二)一七九三年)寂。

一四 青葉若葉

あらたふと青葉若葉の日の光
 目には青葉やまほとゝぎす初がつを
 鞘ばしる友切丸やほとゝぎす
 杜鵑なくや湖水のさゝにごり
 一聲の江に横たふやほとゝぎす
 蘭田刈つて水雞に遠き寢覺かな
 行水の捨てどころなし蟲の聲
 石工ののみ冷したる清水かな
 橋おちて人岸にあり夏の月
 夕立や家をめぐりてあひる鳴く
 夕涼よくぞ男にうまれける

芭蕉 素堂 丈草 芭蕉 蓼太 鬼貫 蕪村 太祇 其角 其角

(一)俳人、歌人。名は常規、愛媛縣の五人。明治三十五年、俳諧大要、病牀六尺、類聚、俳話、俳句、帖抄等の著句あり。二十卷に収められてゐる。(二)群馬縣碓氷郡

寸馬豆人

あはひ

一五 信濃路の旅

上野より汽車にて横川^(一)に行き、馬車にて碓氷峠を越ゆ。鳥の聲耳もとに落ちて、見上ぐれば千仞の絶壁、百尺の老樹、聳えくゞて天も高からず。樵夫の唄足下に起つて、見おろせば、つた、かづらを傳ひて渡るべき谷間に、腥き風さつと吹きどよめきて、萬山自ら震動す。遙かに來し方を見返るに、山また山峨々として、路いづくにかある。寸馬豆人と言へるは彼かとばかり疑はれて、
 つゞら折いく重の峰をわたり來て

雲間にひくき山もとの里

日もや、暮れかゝれば、四方濛々として、山とも知らず、海とも知らず。駈上る駒の蹄に踏散す雲霧のあはひを見れば、一步の外は削り立てたる嶮崖の底も幽にて、いと怖し。登れどもくゝ窮る所を知

正岡子規^(一)

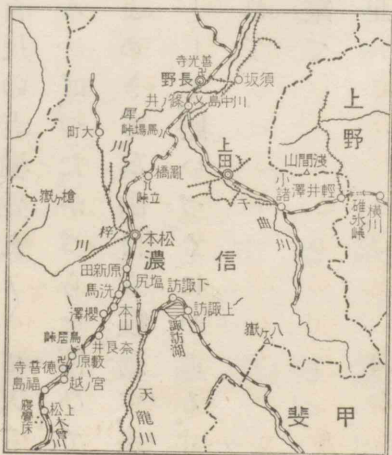
らず。山益、高く、雲愈、低し。

見あぐれば信濃につゞく若葉かな

輕井澤は流石に夏尙寒く、隙間漏る淺間おろしに、一重の旅衣、見果てぬ夢を護るに難かり。例ならず疾く起出でて窓を開けば、幾重の山嶺屏風を繞らして、草のみ生茂りたれば、その色、染めたらんよりも麗し。

山々は萌葱淺葱や時鳥

淺間は雲に隠れて、煙もいづこに立迷ふらんと思はる。汽車を驅りて善光寺に詣で、それより川中島を過ぐ。古戦場はいづくの程とも知らねど、山と山とに圍まれて、犀川のめぐるあたりにやあらん。河の水はいたく瘦せて、ほとりの麥畑空しく赤らみたり。



(一)長野市の北部、天台淨土兩宗の有名な古刹、利皇の御代創建と傳へる極楽寺

日はくれぬ雨はふり來ぬ旅衣

たもとかたしきいづくにか寝ん



木會行脚の中の子規

次の日雨晴る。路に立てる芭蕉塚に興を催してたどり行けば、行手遙かに山重なれり。野の狭う尖りて、次第々々に入る山路險しく、弱足に登る馬場峠、さても苦しやと休む足下に、誰が栽ゑしか、珊瑚なす覆盆子、旅人も採らねばや、こぼるゝばかりなり。少し登りて、とある樹蔭の葦簾茶屋に憩へば、主婦のもてなしぶり、谷水を五六町の麓に汲みてもて來る汗の滴り、情を汲む一口に浮世の腸は洗はれたり。一樹の蔭、一河の流とや、聖の教も時にあうてこそ有難けれ。この夜は亂橋といふ怪しの小村に足を留む。隣室の雑談に夢覺

(一)長野縣更級郡、猿ヶ馬場峠といふ

されて、つとめて此所を立出づれば、はや爪先あがりの立峠。旅の若衆と見て取つて、馬子が馬に乗れとの勧め。有難や乗りて見れば、旅程氣樂なるものはなし。昨日の馬場峠はなぜに苦しみし。路のあたり(一)に咲く白き花を何ぞと問へば、これなんうつぎと申す。と言ふいと嬉しくて、

むら消えし山の白雪来て見れば

駒のあがきにゆらぐ卯の花

峠にて馬をおる。鶯の時ならぬ音に驚かされて、

鶯や野を見おるせば早苗取

松本にて晝餉した、む。早く木曾路に入らん事のみ急がれて原新田まで三里の道を馬車に縮めて洗馬(二)までたどり著き、饅頭にすき腹を肥して、本山(三)の玉木屋に宿る。

本山を出で櫻澤(四)を過ぐれば、此所ぞ木曾の山入。山の景色、水の有

(一)東筑摩郡。松本市の南方。
(二)原新田の南約八キロメートル。
(三)洗馬の南約四キロメートル。
(四)西筑摩郡。本山の南約四キロメートル。

現をぬかす

(一)櫻澤の南約八キロメートル。

(二)奈良井の南約二キロメートル。

(三)西筑摩郡木祖村字藪原。

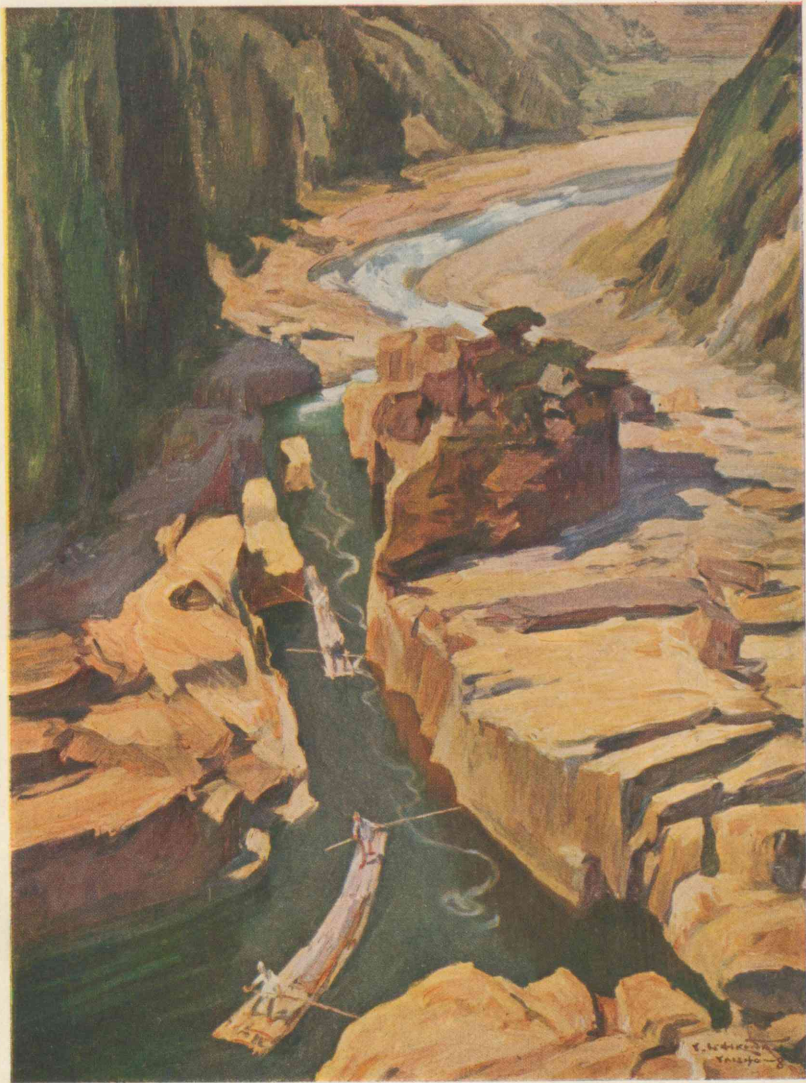
(四)西筑摩郡北境の山中から出美濃、尾張を通過して伊勢灣に注いでゐる。長さ二三キロメートル。

様はや尋常ならぬけはひに現をぬかし、桃源遠からずと獨り勇めば、鳥の聲も耳にたちて珍し。

奈良井(一)の茶屋に憩ひて、ぐみはなきか。と問へば、ぐみといふ物は知り侍らず。珊瑚實ならば背戸にあり。と言ふ。山中に珊瑚、さてもいぶかしと裏に廻れば、やはりぐみなり。あるじの女房深切に採りてくれたり。峽中第一の難所と言ふ鳥居峠は、若葉の風に夢を薫らせ、瘦馬の力に面白う攀登る。

馬の背や風吹きこぼすしひの花

頂にて馬をおり、つくづく四方を見おるせば、古木鬱蒼、谷深くして、樵夫の小徑微に隠見す。珍しく晴渡りたる空の青嵐を踏まへながら山を下れば、藪原(三)の驛なり。或家に立寄りてお六櫛を求む。このほとりよりぞ木曾川(四)に沿うて下るなる。白雲をあやどる山脈は愈迫りて、かぶせかゝらん勢怖しく、奥山の雪を解して清らかなる水



筆 治 寅 川 石

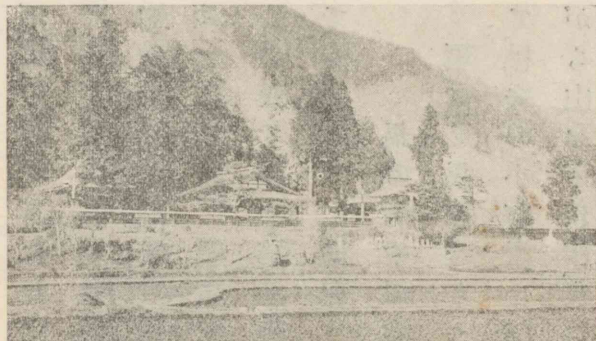
床 の 覺 寢

(一) 藪原の南方約
八キロメートル

(二) 壽永年間(一
八四二)一八
四五年)の建
立

(三) 木曾義仲

(四) 宮越城址。木
曾義仲の本城。
一名山吹城



そゞろに古をしのぶ言葉の端、この翁謠ならばかき消す様に失せ

(所廟の仲義左 樓鐘兼門山右 堂本央中) 寺 音 徳

は谷を縫うて、その響凄じ。深き淵の直中に、大いなる岩の一つ突出
でたる上に、年ふりたる松の枝面白く、龍にやあらんと思はれたる
徳もをかし。宮越(みやごし)の村はづれに佇む程に、いと
古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたるが、晝の
中よりぞ現れ出でたる。笠をぬぎて慰懃に
徳音寺への路を問ふ。翁の言ふ、さても優し
の若者や、旭將軍のなき跡を弔はんとてや
此所までは來給へる。此所に茂れる夏木立
は八幡の御社なり。彼所の山の上こそ昔の
城の址なれ。このわたりの畑も、つはものど
もの住みし夢の名残なるものを、今は桑の
木ばかりぞ秀でたる。と、一つ／＼に指さす。

(一) 德音院殿義山
宣公の略。義
仲の法名。
(二) 西筑摩郡福島
町

(三) 福島と上松と
の間

ぬべし。日照山德音寺に行きて、木曾宣公(一)の碑の石摺一枚を求む。こ
の前の淵を山吹が淵、巴が淵と名づくとかや、福島(二)を今宵の旅枕と
定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。

翌日朝大雨待てども晴間なし。傘を購ひ來りて書流す句に、
をりからの木曾の旅路を五月雨

旅亭を出づれば、雨小やみになりぬ。このひまにと急げば、雨の脚
に追ひつかれ、木蔭に憩へば、また降りやむ。とにかくと雨になぶら
れながら、行きく(三)て、棧(三)に著きたり。見る目危き兩岸の岩の數十丈
の高さに削りなしたる様、一雙の屏風を押立てたるが如し。神代の
昔よりむし重なりたる苔の、美しう青み渡れるあはひく(三)に、何げ
なく咲出でたる杜鵑花の麗しさ。狩野派にやあらん、土佐畫にやあ
らん。下をのぞけば、五月雨に水嵩増したる川の勢、渦まく波に雲を
流して、突きては割れ、當りては碎くる響、大磐石も動く心地して、後

(一)松尾芭蕉の命をかけた句「かかはしやたかづら」の句碑。

の茶屋に入り、床几に腰うちかけて目を瞑ぐに、大地の動き、しばしは止まず蕉翁の石碑を拜みて、さゝやかなる橋の虹の如き上を渡るは、我が身も空中に浮ぶかと疑はれ、足の裏ひや／＼と覺えて、強くもえ踏まず。通り來し方を見渡せば、此所ぞ棧の跡と思しきも、今は石を積固めたれば、固より往來の煩もなく、唯つた、かづらの力がましくはひまつはれるばかりぞ、古の面影なるべき。

昔たれ雲のゆききの跡つけて

わたしそめけん木曾の棧

(二)上松を過ぐれば、程もなく寢覺の里なり。寺に至りて案内を乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙かの上



床の覺寢

(二)長野縣上水内郡三輪村字上

(一)江戸時代の俳人。名は彌太郎。信濃の文政四年(一八二二)八月二十一日(茶旬帳、七番日記、九番日記、おらか春三韓人等の著がある)が三韓人等の著(二)二四六一年。

を指さして、此所は浦島太郎が龍宮より歸りて後に、釣を垂れし跡なり。川の直中に松の生ひたる大岩を寢覺の床岩、その上の祠を浦島堂とは申すなり。その傍に押立てたる岩を屏風岩、疊み上げたるを疊岩と言ふ。象岩はその鼻長く、獅子岩はその口廣し。この外、腰掛岩、俎岩、釜岩、硯岩、烏帽子岩など申すなり。いと殊勝氣にぞしやべりける。

誠や此所は天然の庭園にて、松青く、水清く、いづこの工匠か削り成しけん、岩石は峨々として高く低く、或は凹みて渦をなし、或は逼りて瀧をなす。いかさま仙人の住所とも覺えて尊し。

— 瀨祭書屋俳話 —

一六 みとり日記

(二) 享和元年四月二十三日 晴

(一) 小林 一茶

蓬が下の土

いかなればかゝるあさましき所にうつぶき給ふらんと抱き起し侍るに、蓬が下の土となり給ふ前表ならんと、後に思ひ知りたり。いかなる悪日にやありけん、些か心地惱ましようとなんありけるに、急に發熱さかんにして、膚は火にさはるが如くなれば、飯を勸むれども一箸も咽へ通らず。こはいかにと、ひとり驚き、魂を消すといへどもせんすべなく、唯揉みさするより外はなかりけり。

五月三日 晴

迅積は己がさじにては薬も得とゞかざる旨告げたりけるに、今まで神佛とも頼みし醫師にかく見はなさるゝ上は、祕法、佛力を借り、諸天應護のあはれみを請はんと思へども、宗法なりとて許さざれば、唯手を空しうして最期を待つより外はなかりけり。さてしも果てぬ事なれば、善光寺の醫師道有を招かまほしく、とみに人を走らせけり。今に玉の緒のあまりも、この度は元の人になり給へと、醫

玉の緒

(匙)

たうぶ

師の來るをのみ待ちあたりけるに、日入果てて門々に灯點す頃、やや駕籠の見えければ、とく病人を見しむるに、迅積が言へる如く、萬に一つもこの世の人とは見えずとなん言はるゝ。今は頼むべき綱も切れて、唯湯水の咽に通ふを力に、夜の明くるを待ちたりけり。

四日

昨日にうちかはりて顔色うるはしく、何ぞたうべたきなど言はるゝに、嬉しさ限りなく、よべの薬の驗に親の蘇りたる心地して、かたくりなど練りて參らせけるに、椀に三つ四つすゝりこみ給ひき。道有も、この趣にて變の來らざれば、程なく快氣なるべしとなん言はるゝに、枕に附添ふ己もやゝ安堵の思をなしぬ。道有老歸り給ふに、古間の里まで見送り侍り。雨雲も西へ東へかたづきて、空の様こよなう珍しく、時鳥の初音をり得顔に告渡る。この鳥とくに啼きつらんに、父の異例の日より、日は日すがら、夜は夜すがら心を空にし

異例

(一)今の長野縣上水内郡古間村。一村の故郷。柏原村の南方。

て仕へまつれば、魂狂ふ事のみにして、聞きつるは今日始めての心地なりき。

時鳥われも氣あひのよき日なり

七日 晴

(一)一茶の異母弟。

仙六は薬を請ひに善光寺へ行く。

夏の日のつれづれにおはしければ、何ぞたうべたき。と問ひ参らせたれども、穀のたぐひしかく、と好み給はねば、梨一つ参らせたく思へども、みすゞ刈る信濃の不自由なる我が里は、青葉がくれに雪の白々残るばかり、野もせ、山もせ、夏尙寒き風の吹くのみなりき。梅賣る人の聲の門に聞ゆれば、青梅たうべたしとむづかり給へど、毒なりと参らせず。あはれ、何時の日か毒断のなき人にして見まほしく心は騒げども、うつらくと首重たげに見え給ふぞ、あぢきなき有様なる。

毒断

(二)今の上水内郡柏原村。

十日 晴

頻りにありのみたうべたしとむづかり給へば、このあたりのゆかりあるもなきも、親しき限り富みたる家、心あたりある門、聞きつくし尋ね搜しつくすといへども、ありのみ一つ貯へたる人としては、なく、夏さへ寂しき山國なりき。今日は薬の絶間なれば、善光寺へ行かまほしく、曉にしたくして門を出でけるに、五月の空もほのく、晴れて、白雪ははた山にあるからに、青葉がくれの花は春を残して、種蒔の山人など懐かしく、時鳥の三聲一聲も、こよなく時めく空なるに、何となく心晴れぬ曙なりけり。卯の下刻、牟禮(二)てふ驛に至るに、こはそのかみ一茶江戸へ赴ける日、父の翁見送り給ひし里なりけるが、今は二十四年の昔となりき。川の音、坂の影もほのかに心おぼえありて、何となく嬉しけれど、人は知らぬ顔のみとなりけり。辰の刻ばかりに善光寺に著く。

時めく

(一)今の上水内郡中郷村の字。柏原の南約八キロメートル。
(二)一茶と繼母との中が、悪かつたの、お茶より家におくより、十四歳の時、江戸へ奉公に出たのである。

(一)二十四孝の一
人督の孟宗の
母が嚴冬中に
で箭を請うた
に孟宗は竹林
に入つて竹の
に雪を泣かす
と矢が生じた
といふ事
(二)二十四孝の一
人督の王祥の
母が病に臥し
て魚を請はれ
た時、母は生
生魚を請はれ
た時、母は生
して水が凍結
したため、母
衣を着て、水
に脱いで、解
所に水が解け
たといふ事
(三)今の上水内郡
吉田町の長野
市北約五キロ
メートル

抑、この地は御佛の淨土にしあれば、肆の軒を争ひ、幌は風に翻り、
入る人、出づる人、國々より遙々あゆみを運びて、未來の成佛を希は
ぬ人なかりき。己は今日父の命を受けて、御藥使はた梨を搜しに來
つるなれば、天をかけり地をくづりてなりとも梨一つ得まほしく、
ある程の乾物店、ある程の青物店を、足を空にして、驅巡るに、悲しさ
はさらに片われ一つありとさへ言ふ人はなかりき。昔雪中に箭を
掘り、氷上に魚を求めしためしもあるに、我梨一つ得る能はざるは、
皇天我を捨て給ふかや、佛神我を見限り給ふかや、一世ばかりの不
幸にはあらず。父はさぞ梨を待ち居給ふらん。このまゝに歸りて、父
を何と慰めんと思へば、胸せき塞がりて、忍び落つる涙は大道を潤
し、往き來の人の狂者と笑はんも恥づかしく、暫く手を組み首をう
なだれて、心を静めけり。この地になき物いづちにかあらん。唯一足
も早く戻りて、藥ばし進め奉らんと、手を空しうして吉田^(三)てふ里に

(一)今の新潟縣高
田市の柏原よ
り北約五キロ
メートル
根なしこと

(二)俳人。名は藤
吉。明治十七
年。東京市に生
びれた。句集及
び観音巡禮、山
京洛小品、川
蕉風景の著者
ある。行住等

來れるに、木立の山鴉三つ四つ我を見ては聲をたつるに、何となく
父の身の上の心にかゝり、息もつぎあへず足をはやめし程に、日影
八つ時といふ頃宿に戻る。父は何時よりも顔色うるはしく、笑を含
み給ふに、梨を得ざりし事を語らばまたや氣色を失はん、とやせん
かくやせんとためらふに、父の聞き給へば、ありのまゝを答へ、高田^(一)
へ参りて尋ね來り参らすべしと、白雲のよすがも知らぬ根なしご
と申して、父をなだめ奉りしは、本意なき夕なりけらし。

一七 芭蕉と一茶

荻原井泉水^(二)

俳句が興つてから今日まで三百年、その間に最も輝いてゐる二
俳人は芭蕉と一茶とである。世間もまたさう見てゐるらしい。しか
し、何故にこの二人が俳句作者として代表的であるかと言ふに、芭
蕉は自分の全人全心を以て俳句に向つた。彼は佳句を作らうと

はせず、唯正しく生きようとした。そして彼の生活が純になればなる程、彼の藝術としての俳句が醇になつて來たからである。一茶にあつては、彼といふ人とその俳句とがびつたり一つである。彼の吐くその息がそのまま俳句になるかと思はれる程自然に、そして無造作に句作した。そしてその作が悉く一茶になつて躍動してゐるからである。私は思ふに、俳句は心の藝術である。または境地の藝術だと言つてもよい。俳句が唯表現として、言葉として、その對象を、或は意味を傳へるだけに止るならば、それは僅かに十七字の小さな藝術、否寧ろ繊細な工藝品に過ぎまい。俳句はいかに小さくとも、その作者の人間としての素質を、傾向を、そして自然に對する態度や觀照を、全的に盛つてゐるものであつてこそ、始めて一つの藝術として特殊な位置を占め得るものではないか。

そこで芭蕉の句と一茶の句とを較べて見ると、その風格でも、趣

味でも、がらりと違ふ。それでゐて、どちらも本當の俳句に違ない。後世芭蕉を真似てそれらしく作つた作が一向につまらなくて、芭蕉とは全く毛色も風味も違つた一茶が、俳人として芭蕉同様に優れてゐるといふのは、面白い事である。これも俳句には、本來俳句といふ趣味があるのでなくて、俳句はその人の反映として光るといふ意味を語つてゐるものではないか。

芭蕉と一茶とは共に俳句をよく活したと言へる。俳句といふものは芭蕉以前から存在してゐたが、和歌の三十一字を折半した形だけに過ぎなかつた。それに精神を吹きこんだ者が芭蕉である。芭蕉去つて以後、俳句は芭蕉の模倣者に依つて盛んに弄ばれたが、精神のない骸むくろだけのものになつてしまつた。それを再び新しい精神に於て活した者が一茶である。芭蕉と一茶とは僅かに百二十年を隔ててゐるだけであるが、一茶の句になると、芭蕉のそれとはすつ

かり變つて、時代的な心持になつてゐる。この差別は、この二人の素質の差である。芭蕉は人から施されて生活してゐたものだが、彼はもらつて食ふといふ事を、めでたき人の境遇だといふ風に考へてゐたらしい。賤しい乞食ではなくて、人から淨財を受ける高僧の風がある。金には目をくれぬといふ貴族的な所がある。で、芭蕉の句には、すべて彼の高貴な風格がにじみ出てゐる。その句の取材や言葉に於ては俗語を嫌はなかつたが、その趣味は非常に洗練されたもので、即ち俗を去つて雅を磨いたのである。芭蕉が一句を作るのは容易な事ではない。推敲に推敲を重ねて出来るといふ風である。つまり俳句といふ小さな形が、芭蕉の作にあつては珠玉の如く見出されて、小さくて貴い物に位づけられたのである。これも俳句といふ小さな形を活す一つの正しい道であるに違ない。しかし、一茶の行き方はそれとはまるで違ふ。彼は芭蕉の様に句作に苦しんだ風

はない。敢へて風雅の道に向上しようなどとも心掛けない。唯思ふ所感ずる所を言葉にした。それが彼の日記で見ると、毎日數句づゝ何十年と作り續けてゐた。そしてかく容易に作られる物としては、俳句の様に短い手輕な詩形でなければなるまい。この意味で、一茶は俳句といふものを、民衆的な誰にでも出来る詩として活したのである。一體、一茶といふ人の素質からして、芭蕉の様に高貴な所はない。彼は自ら「乞食の首領」と文には書いてゐるが、彼には自分から好んで無所有の境涯に入る様な氣持はない。物質的の欲情に就いては、世間一般の人の心持と大した差別がない。彼はどこまでも民衆中にあつて、民衆の聲を揚げてゐる。芭蕉は聖僧らしく、そこが芭蕉の偉い所であるが、ともすると、象牙の塔に隠れてしまひたがる。一茶はどこまでも下座ひざに著いてゐるので、あぶなげがない。そしてすべての人の親しい友だちとなる。芭蕉風の俳句の行き方は

高踏的

芭蕉の俳句

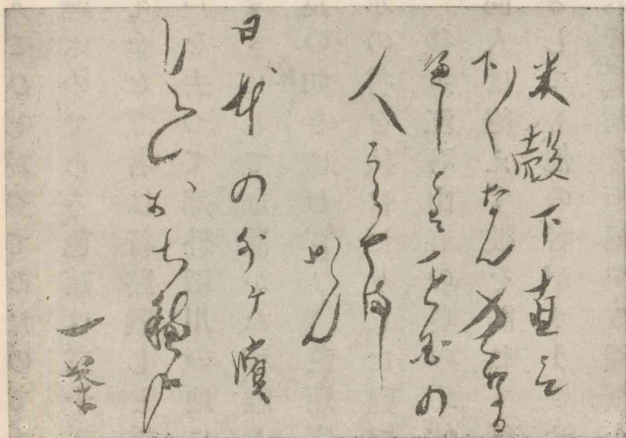
高踏的である。少数の天分あり氣根ある人の達し得る所を目がけて進む。一茶流の俳句の行き方は民衆的である。萬人向である。誰にでも手が届く。そして誰にでも親しまれるものである。この二人は別々の意味に於て俳句を活したのである。

芭蕉は句作には随分苦しんだ。それは俳句の言葉を練る爲ではなく、それに依つて自分の心境を磨く爲に苦しんだのだ。佳い句を實らす爲には、心の木を佳くしなければならぬ故に。例へば、禪門の徒が一つの公案を含んで坐禪辨道をする様に、彼は俳諧道の向上を以て、即ち自己心境の向上に資したのである。これは自力宗の行き方である。一茶にあつての俳句は、芭蕉の様に、そんなむづかしい物ではない。彼は幼少の頃の氣持を、われと來て遊べや親のない雀と口誦んでゐる。無造作な、唯言はないであられない事を言ふ心持が、彼の死ぬまで俳句を詠ひ續けた心持である。彼にあつてその俳

坐禪辨道

自力宗

米穀下直にて下々なんきなるへしとはこと國の人うらやましからん日本の外ヶ濱迄おち穂哉
一茶



句は、或時は「悲しき玩具」でもあつたらう。或時は「寂しき杯」でもあつたらう。また俳句は彼の偽らざる獨

言であつた。時には楽しい唄でさへもあつた。ともかく一茶にあつては、一日々々を生きて行く上に、俳句は缺くべからざるものだつた。この意味で、一茶もまた俳句を以て自分を活したと言へるが、俳句を以て自分をよくしようなどといふ自力的な事とはまるで違つてゐた。

芭蕉はみづから獨りを求めて、獨りの清境に徹しようとした。死ぬまでさうだつた。一茶は五十二歳にして始めて結婚をしたが、生涯の

薪水の勞

(一)滋賀縣滋賀郡
石山村
隱栖
(二)滋賀郡大津の
東南
(三)一卷。嵯峨で
落柿舎といふ
所に閑居して
居た時の日記

大部分は孤獨で暮した。彼は何時も他からひとりぼつちにされて、人こひしがつてゐたのである。その孤獨も、芭蕉と一茶とでは大分違ふのである。芭蕉は三十八歳の時、長安は古來名利の地、空手にして金なき者は行路難しと言ひけん人の賢く覺え侍り。と言つて、江戸を去つて郊外深川の地に獨り隠れたが、門弟たちは彼を獨りのまゝにしては置かぬ程、誰々と代つて足繁く訪ねて來たり、また曾良の如きはわざ／＼芭蕉庵の附近に家を借りて、日毎彼の爲に薪水の勞を扶けたりした程であつた。

後、近江石山寺の奥の幻住庵に隱栖した時も、大津膳所あたりの同人は絶えず彼を訪ねて行つたらしい。彼がいかにも獨りで居ようとしても、他の者がさうさせぬといふ風が見える。また彼とても門人の愛情を拒絶する程厭人的ではない。嵯峨日記を見ても、門人たちと膝を交へて物語つて居た日が多い。稀に、二十七日、人來ら



(筆 郎次清井荒) 蕉芭の庵住幻

ず、終日得閑、などと書いてゐる。晩年に再び深川庵を修して住んだ時、人來れば無用の辯あり、出でては他の家業を妨ぐるも憂し。と言つて朝がほや晝は錠おろす門の垣彼は、面會謝絶と張出したわけでもあるまい、また親しい門下たちの來るのを喜ばなかつたのであるまい。だが、有象無象の爲に閑をそがれる事を嫌つて、うは手に訪客御斷と申し出た。此所にも芭蕉の隱遁主義に個人的な高貴な味はひのある事が分る。

一茶の孤獨は、彼が好んで其所に就くのではなく、彼は三歳の時母を失つてから、いやでも孤獨の苦味を知らねばならなかつた。八

三
歳の時繼母が、來た。義弟が生れた。それから彼は奴隸の様に子守と耕作の手傳とに追使はれた。杖の憂き目を見ること、日に百度」と、彼は追憶の日記に書いてゐる。

まゝつ子やすゞみ仕事に稟たゝく

彼が十四歳の時、父は一茶を繼母の許に置くに忍びなく思つて、江戸へ出した。彼の孤獨な放浪生活は、その時から三十年餘りも續いた。四十八歳の時、故郷の土を懐かしく思つて戻つて來たが、繼母と義弟とが餘りに専横な仕業をするので、故郷やよるもさはるも茨の花と吟じて、草鞋も解かずに去つてしまつた。その後和解が成立して、始めて故郷に落著く事が出來、妻をも娶つたが、その妻には死なれた。次に後妻をもらつたけれども、直ちに離別してしまつた。

小言いふ相手もあらばけふの月

これは六十一歳の時、先妻に死なれた年の作と見える。五十を過ぎ



野人 一茶 (高山完筆)

てから漸くさゝやかな幸福を握つたかと思ふと、その幸福にも逃げられて、やつぱり寂しい自分の孤獨を見出さねばならなかつた。彼には故郷なる柏原の近郷に親しい門人が數名あつた。彼の日記で見ると、庵にゐるよりも、門人の家をちよこまかと歴訪して歩いて居た日の方が多し。それは寂しくてたまらないので、また來たぞといふ風である。そして彼は門人たちに嫌はれたわけではないが、晩年にはその門人たぬ。彼は門人と同行する事などは稀で、何時も獨りでほく／＼と寂しく歩いて居た様である。一茶の孤獨は、芭蕉のその様に自主

的な好尚ではない。他動的な、據所なきもので、言はば運命的なものであつた。言換へると、一茶は芭蕉に見る如き隱遁主義の人ではない。一茶はどこまでも俗世間に交り、一個の平凡な人間として生きようとした。そしてこの萬人の味はふべき人生の姿を、自分の言葉をもつて詠つたのである。かうした所に生粹な民衆作者としての一茶の面影がある。

ともかく芭蕉にあつても、一茶にあつても、その人として渾然たる境地に入つた所が、その人の藝術として圓熟した味はひを出した所である。俳句は決して文字の小技ではない。心境の藝術である。芭蕉が詠へば芭蕉として活き、一茶が吟ずれば一茶として活きる。それにしてもこの二人は俳句藝術のそれ々に趨るべき二つの極點を暗示する。若しくは俳句藝術のそれ々に流れ出た二つの發足點を明らかにするものである。

一八 郷土の魅力

相馬御風(一)

郷土といふものの人間の心を引附ける作用は、今更ながら不思議なものである。一方に、月日は百代の過客にして、行交ふ年もまた旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲所とす。古人も多く旅に死せるあり。余も何れの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまず。と言ひ、或は「羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なんこれ天の命なり。」などと言つてゐたかの芭蕉翁でさへ、他方に於ては

「代々の賢き人々も故郷は忘れ難きものにおもほえ侍る由。我、今は初の老も四とせ過ぎて、何事につけても昔の懐かしきまゝに、はらからのあまた齡傾きて侍るも見捨難くて、初冬の空のうち時雨る、頃より、雪を重ね霜を経て、師走の末、伊陽の山中に至る。

(一) 詩人、評論家、名は昌治。明治十六年新潟縣に生れた。御風の詩集、黎明期の文學、野を歩む者、一茶と芭蕉とを語る等郷土に著がある。

羈旅

なほ父母のいまそかりせばと、慈愛の昔も悲しく、思ふ事のみあ
またありて、

ふるさとや臍の緒に泣く年の暮
などと言つてゐる。

ふるさとは蠅まで人をさしにけり

ふるさとは西も東もばらの花

といつた風に、永い間自分の故郷を詛つて、旅から旅へと漂泊して

居た、あのすね者の俳諧寺の一茶ですら、晩年には

これがまあつひの棲所か雪五尺

などと驚きながらも、その雪の深い信州柏原の郷里に歸り住んで、
其所で一生を終へた。

更にかの近世稀有の聖僧と言はれる越後の良寛和尚の如きも、
二十二歳から四十三歳までの二十餘年間の雲水行脚の旅にあき

たらないで、それ以來ずつと越後の郷里に孤獨な庵住生活を續け
て、靜かな往生を遂げてゐる。

ふるさとへ行く人あらばことづてん

けふ近江路をわれ越えにきと

草まくら夜ごとにむすぶやどりにも

むすぶは同じふるさとのゆめ

などといふ彼の旅中の歌を讀んでも、いかに彼が故郷を慕ふ思の
切なものであつたかを察する事が出来る。二十三歳で妻子を振捨
てて佛門に歸し、諸國修行の旅に出た西行も、

柴の庵のしばし都へかへらじと

おもはんだにもあはれなるべし

世の中を捨てて捨てえぬ心地して

みやこ離れぬわが身なりけり

などと歌つて居り、且晩年には都に歸つて死んだ。

かう言つた風に、昔から代表的な漂泊の人々として知られたこれ等脱俗の人さへも、不思議に彼等の生れ且育てられた郷土に對しては、しかく切な愛慕の情をもつて居た。抑、この郷土の人間に對してもつてある魅力は、どこから來るのであらうか。

抑、郷土が私たちの心を引附ける點は、どういふ所であるか。その地の自然が、他の何れの土地よりも風景の美に於て優れてゐる爲かと言ふと、必ずしもさうではない。人情が特に他の何れの土地のそれよりも醇美である爲かと言ふに、それも然りとは言へない場合が少くない。それでは何か特別に自分の生活に都合のいゝ、外的條件がある爲かと言ふに、それも必ずしもさうばかりとは言へない。さうかと言つて私たちは、理智的に考へて、故郷といふものは大切なものだと言つて私たちが、理智的に考へて、故郷を慕つてゐるとは尙

醇美

理智的

更考へられない。

然らば、人々は何故に自分の郷土といふものに心を引かれるのか。それは全く何とはなしにである。理智的判断によるのでもなく、功利的見地からでもなく、或は特に美的判断が然らしめるといふのでもなく、それは唯、何とはなしにである。郷土の人心を引附ける魅力は、實にこの何とも言つて見やうのない所から發する。それは自然と人間と、過去と現在とを一つに融した一種不思議な音樂的な、詩的な魅力である。また私たちが郷土を慕ふ心は、全く自分にもよく分らない内心自發の情緒である。いかなる力を以てしても否定し難い本然的情緒である。この不可思議な情緒の存在してゐる事實は、恐らくいかなる理智の人と雖も、否定する事は出來ないであらう。

けれども、今の時代には、追々この自分の郷土といふものを失ひ

功利的見地

本然的情緒

つゝある人が多くなりつゝある事も、また明らかな事實である。私は曾て、漁夫に取つて海は單に彼等に生計の資を與へる爲のみの場所ではなくして、また實に彼等に取つての貴い心の糧を與へる領土であるといふ様な事を書いた事がある。全く漁師程海を愛する事の切な者はない。それは海は彼等に取つては離れ難い心の世界である。農夫に取つて山野田畑が單に彼等の生計の資を得る場所でないと同じである。

外に愛慕すべき郷土を失ふ事は、同時に内に心靈の故郷を失ふ事である。漁師に取つて、海は單に生計の資を得るのみの場所と考へられる時、漁師は即ち心の故郷を失ふのである。農夫が山野田畑を生活の爲の資を得る場所とのみ考へる時、農夫は心靈の郷土を失ふのである。

西洋の或新しい女の哲學者の書いた物の中に、こんな一節があ

つた。

「ロシヤとの戦争中、粗末な米の飯を有難がつてゐた日本の兵士は、何かの機會に僅かばかりの草花でも見ると、ヨーロッパの遠足家のそれにもまして、一種の精神的更新を感得したといふ事である。一體、ヨーロッパの遠足家は、無慈悲にも自然の最も美しい春の著物である所の草花を汚したり、様々の樹木や記念物を傷つけたり、卓子や椅子などにまで容赦なく自分のつまらない名前などを彫りつけたりなどして、彼等自身を楽しませてゐる輩である。」

私たちは一般のヨーロッパ人が、それ程自然を愛し得ない人たちであるかどうかの事實を知らない。しかし、私たち日本人が一般に自然を愛する切な心をもつた民族である事實は、信じて疑はない。自然は何と言つても私たちの心の故郷である。脚氣患者が郷里に

歸る事によつて、何時とはなしに健康を恢復する事が出来る様に、私たちの傷ついた心は、魂は、心の底から自然を愛し、自然を懐かしむ事によつて、その健康を取戻す事が出来る。

自然を魂の郷土として懐かしむ事の出来る幸福を、私たちは永遠に失ひたくない。私たちは自分にも、また自分の子どもたちにも、永遠に、郷土の有する魅力を失はせたくはない。それは私たちの爲の搖籃であつて、また墳墓であるべきである。

— 對山雜記 —

自修文

海を思ふ

中村孝也

夏になると海を思ふ。蒼い色、白い浪、日は照映えて、爽涼の氣が溢れる。

我等の祖先は海の子であつた。海は自由の世界である。我等の祖先は自由の子であつた。

(一) 歴史家、文學博士、東京帝國大學助教授、馬治、生、八、群、馬、縣、に、生、れ、た、源、九、郎、義、經、等、の、著、か、あ、る、爽、涼、す、わ、か、で、す、す、い、こ、と、

美しい群島

日本のこと

北より南より、大陸より南洋より、彼等は美しい群島に集り來つた者であつた。小さな舟を操つて、萬里の波濤を越えた。彼等の勇敢な氣象は、眞に讃すべきかな。

海は活動の世界である。彼等は實に活動の子であつた。

風は動き、雲は動き、浪は動き、人もまた動く。彼等の航海は、思へば奇しきものであつた事であらう。

故郷の山は淡い靄の裡に包まれて、次第に遠く消えてしまふ。軟風が軽く額を吹く。綱具は鳴る。帆布は張る。舟はたゆたに搖ぎながら、朝日の直中を進んで行く。日輪は昇る。浪は黄金を溶した様に輝く。日輪は退く。殘光漸く褪せて、黄昏の紫の裳裾がおもむろに海原を蔽ふ。數多の星は水線の上に浮び出て、燦らかに大空の旅路にのぼる。

月一輪、高浪の峰を傳うて、ひた走りに走る。

奇しきもの、奇態なもの、軟風、そよ／＼と吹く風、綱具、綱と結合した滑車、たゆたにゆらゆらと、殘光、夕映、水線、水平線、ひた走ること、すちに走る

その神
「美しき幻影」
をさす。

見ぬ世の姿に
云々
見知らぬ故郷
の様な懐かし
さが潜在意識
となつて、何
と云ふ事なし
に海がこひし
く思はれるの
意
遠く逝きにし
母の云々
海はあなたを
思ひかしたな
感情は死した
早く死別した
その乳房のた
した記憶とて
はたしなかに
はたしなかに
持と通ずるも
意があるとの

光景は刹那々に變る。美しき幻影は髣髴として断えず行く手に馳せる。その神に導かれて、舟もまた馳せる。人は皆つぶやく、「あはれ女神よ、いづこまでも慕ひ行かん、御袂にすがり参らするまでは」と。

あこがれは誠となつた。美しき群島は、にこやかに彼等を迎へた。彼等は悦んで山に木こり、水にすなどり、廣野をたがやし、歌ひつゝ、踊りつゝ、その生活を樂しんだ。そして何時とはなしに、故郷の記憶は消えてしまつたのであつた。

それより後幾千年。忘れられた故郷の思出よ。さは言ふものの、子孫の夢は、見ぬ世の姿に淡々として彩られて、春風秋雨、海のあなたを思ひ懐かしむのであつた。遠く逝きにし母の乳房の慕はしさ。

夢の匂
夢の様な慕は
しさ。

(一) 江戸時代の小説の大家、嘉永八年(一八〇五)元戸の南、南總里十八年(一八〇五)見八、張月等の著がある。
(二) 漢書、賈誼傳、塞翁が馬
(三) 老子

それは甘く、快い慕はしさである。眼は何時も海のあなたに向ふ。海のあなたには白い花がほゝゑむ。その花には夢の匂がある。何やらの懐かしさ。

往かばや、あなたに、遠く海を越えて、風は動き、雲は動き、浪は動き、人もまた動く。海は自由の世界である。活動の世界である。光明と希望との世界である。悠久の存在、永遠の生命の世界である。

夏になると何時も海を思ふ。蒼い浪、白い帆。月は美しく照映えて、爽涼の氣が快く流れる。

一九 芳流閣上の血戦

瀧澤馬琴

古の人言はずや、禍福はあざなへる繩の如し。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。それは福の倚る所、はた禍の伏する所、彼にあれば此にあり。とは思へども豫てより、誰かよくその極を知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身につけつ、

(一)下總國(茨城)縣古河

(一)擲(怒)

艱苦のうち、年を経て、得難き時を得てしかば、遙々(一)滄我へもたらして、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の刃はもとの物ならで、我が身をつんざく譬とぞなりし、憾を茲に釋く由もなく、事急にして意外にあり、僅かに當座の辱を避けば



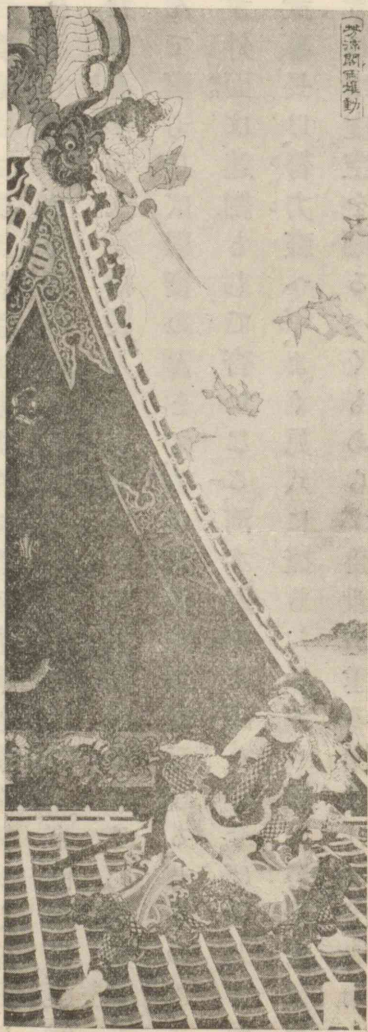
瀧て、芳流閣の屋の上に、攀登れどもとにか、澤くに、脱れ去るべき道のなければ、其所に馬必死をきはめたる、心のうちはいかなり、琴けん、思ひ遣るだにいと傷まし。

のあらずして、月來獄舎に繋がれし、禍は今恩赦の福我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀、犬塚信乃をからめよ。とて、なまじひに擇み出されつ、他の憂を身の面目に、今更用ひられん事、願はしか

身を霞ませて

(一)利根川の異稱

らずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高き、かの樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく、堪難き、頃は六月二十一日、昨日



(筆年芳岡月) 戦血の上閣流芳

も今日も乾蒸の、ほてりを渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、此所生死の海に入る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の舟楫緒絶えて、進退既に谷りし、敵にしあればいかで我、繋ぎ留

(騎鼠)

(一) 武蔵の異名

(二) 足利持氏の子、鎌倉の管領

(三) 管領足利氏の執權職

(四) 支那周代の哲學者、名は瞿、姓は公輸、名は般、魯の人名巧に機械を作つた

(五) 支那の異名

めんとむさびの樹傳ふ如くさらりと登り果てたる三層の屋根にはまぶしさす由もなく、かたみに隙を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巢を、巨蛇の狙ふに似たりけり。廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床几に腰をうちかけて、勝負いかにと見上げたり。また閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、槍長刀をきらめかし、或は矢を負ひ、弓杖突立て、組んで落ちなば撃留めんとて、項を反してこれを觀る。しかのみならず外面は、連綿として杳かなる、河水遶りて砌を浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。かれ鳥ならずも羅に入りぬ、獸ならずも狩場にあり。三寸息絶ゆれば、事皆やまん。脱れ果てじと見えたりけり。その時信乃思ふ様、初層、二層の屋の上まで、追登らんとせし兵等

(一) 第二十九代欽明天皇の朝、百濟の使、朝雪夜幼兒の虎に食はれたるに憤り、虎穴をさがつて虎を獲たり

(二) 和名義盛の臣、將軍實朝の前で二箇の大鹿角を重けて折つた

擬議

を、斬落しつる後は、絶えて近づく者もなきに、今唯獨り登り來ぬるは、世に覺ある力士ならん。しやつはこれ、膳臣巴提便が、虎を暴にせる勇あるか、また富田の三郎が、鹿の角を裂ける力あるか、さもあらばあれ一人の敵なり。引組んで刺違へ、死するに難き事やはある。よき敵にこそござんなれ。目に物見せんと血刀を、袴の稜もて推拭ひ、高瀬の如きはこ棟に、立つたるまゝに寄するを待てば、見八もまた思ふ様、かの犬塚が武藝勇悍、素より萬夫無當の敵なり。さりとてもからめかねて、他の援を借る事あらば、獄舎の中よりこの役儀に、擇み出されしかひもなし。からめ捕るとも撃たるゝとも、勝負を一時に決せんものを、と思ひにければちつとも擬議せず、御詫ごふ。と呼びかけて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くにはこ棟の、左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せつけず、心得たり。と、鋭き太刀風に、撃つをはつしと受留めて、拂へばすかさずこむ刀尖を、支へて

一上一下
手練

見る目遙か

錚然

ていたらく

流す一上一下、滑るいらかを踏止めて、頻りに進む捕手の秘術、彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負をわかざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見る目もいと遙かなり。
さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音、掛聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峰の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなる、いと高き閣の棟にして、死を争ひしていたら、世に未曾有の晴業なれば、見八は被籠の鎖脇當のはづれを、裏かくまで、に切れかれしかど、太刀を抜かず、信乃は刀の刃も續かで、初に淺痕を負ひしより、次第に痛みを覺ゆれども、足場を計りて撓まず、去らず、疊みかけて撃つ太刀を見、八右手に受流して、返す拳に

(罅)

(振)

覆車

附入りつゝ、やつとかけたる聲と共に、眉間を望みてはたと打つ、十手をちやうと受留むる、信乃が刀はつば際より、折れて遙かに飛失せつ。見八得たりとむんずと組むを、そがまゝ、左手に引著けて、迭に利腕しかと取り、ねぢ倒さんと曳聲合せて、揉みつ揉まるゝ、力足、これかれ齊しく踏滑らして、河邊の方へころ／＼と、身をまろばせし覆車の俵、坂より落すに異ならず、勾配險しきかけづくり、に削り成したるいらかの勢、止るべくもあらざめれど、迭に取つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には入らで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、うち累りつゝ、どうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張切つて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐出されつ。しかも追風と引く潮に、さそふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。
——南總里見八犬傳——

(一) 歌人。本姓名は久保田俊彦。長野縣の人。大正十五年歿、年五十。

(二) 歌人。名は繁。宮崎縣の人。昭和三年歿、年四十四。

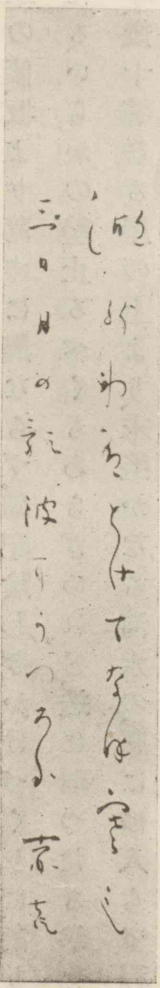
(三) 歌人。名は雄。大郎。明治十年東京市に生れた。

湖の水はとけてなほ寒し日月の影波にうつらふ

二〇 天地の心

(一) 島木赤彦

高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりけるかも



蹟筆彦赤木島

(二) 若山牧水

うすべにに葉はいちはやくもえ出でて咲かんとすなり山ざくら花

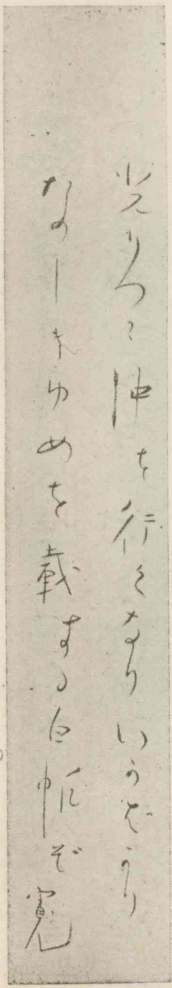
(三) 金子薫園

牛のゆく白河路の水ぐるまかたりことりといとまある

かな

(一) 岡麓

葉ざくらの葉だりの露の朝じめり山吹草の花咲きにけり



蹟筆寛野謝與

(二) 與謝野寛

鳴きに鳴くあさまし長しかしがましみじかき歌をしらぬ蟬かな

(三) 前田夕暮

まひる日のあきらかにてれる山原は大いたどりの花さかりなり

(一) 歌人。書家。名は三郎。明治十年東京市に生れた。

(二) 歌人。慶應大學教授。明治六年京都市に生れた。

(三) 歌人。名は洋。三。明治十六年神奈川県に生れた。

光りつゝ沖を行くなりたいかばかりの帆を載する白帆ぞ

(一) 歌人、小説家、茨城縣の人、大正四年、年三十七。

(二) 歌人、明治二十二年、廣島縣に生れた。

高原の月の光はくまなくくたれ落葉の音すも
(三) 歌人、醫學博士、明治十五年、山形縣に生れた。
(四) 歌人、書家、國文學者、柴舟と號する、東京女子高等師範學校教授、岡山縣に生れた。

よしのにてあかつきのさくらわかきはにかよるきりあめとまはしつや
(一) 歌人、國文學者、明治五年、三重縣に生れた。
しきしまのやまとの國をつくり成す一人と我をしまさ
(二) 歌人、名は幾多、千和、昭和三十四年、多摩縣に生れた。

長塚節 (一)
みたれども
たらちねの母がつりたる青蚊帳をすがしといねつたる

中村憲吉 (二)

夏山をめぐり疲れて日暮がたとりの國の出雲へくだる

高原の月乃光をくまなくくたれ落葉の音すも
齋藤茂吉 (三)

尾上八郎 (四)

しづかなるたうげをのぼりこし時に月の光は八谷をてらす

しづやかに月は照りたりあめつちの心とこしへ動かぬがごと

あつきのさくらわかきはにかよるきりあめとまはしつや
尾上八郎 (四)

ゆく秋の大和の國の薬師寺の塔の上なる一ひらの雲
佐々木信綱 (一)

しきしまのやまとの國をつくり成す一人と我をしまさ
佐々木信綱 (一)

目の前に五百重おきふす雪の山しづかなるかな鷹ひとつかける
古泉千樫 (二)

(一) 歌人、詩人、名は隆吉、明治十八年福岡縣に生れた。

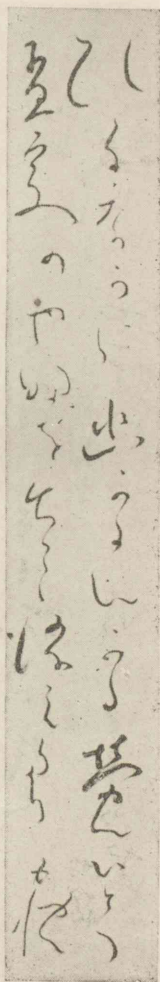
ひるながら
幽かにひか
る螢のよつ
孟夏のやぶ
を出てて消
えけり

(二) 歌人、千葉縣の歌人、大正二年歿、年五十。

天地のよも
の寄合を垣
にせると十
九里のはま
りに玉拾ひ
居

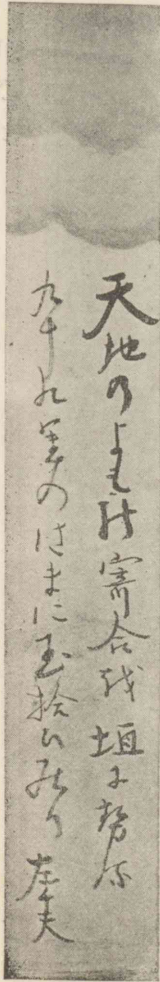
(三) 歌人、國文學者、宮城縣の落合直文、明治三十四年歿、年四十六。

北原白秋 (一)
松原のしぐるゝ寺の前どほりとほる人はあれど日の暮
のかげ



蹟筆秋白原北

伊藤左千夫 (二)
みぎひだり背によりつくを負ひなめて笑あふるゝ眞晝
の家に



蹟筆夫千左藤伊

(三) 落合直文

一つもて君をいはゝん一つもて親をいはゝん二もとあ
る松

二一 流泉啄木

今は昔源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿の親
王と申す人の子なり。よろづの事にすぐれてありける中にも、管絃
の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえな
らず吹きけり。この人、村上^(三)の御時に四位の殿上人にてありけり。そ
の時に逢坂の關に一人の盲庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞ
言ひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雑色にてなんあり
ける。その宮は宇多天皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人
なり。年ごろ琵琶を弾き給ひけるを常に聞きて、蟬丸、琵琶をなん微
妙に弾く。然る間、この博雅、この道をあながちに好みて求めけるに、

(一) 第六十代醍醐天皇の皇孫、天元年(一六四〇年)歿、年六十三。
(二) 克明親王、管絃の道。
(三) 第六十二代村上天皇。
(四) 山城(京都府)と近江(滋賀縣)との國境。
(五) 第五十九代宇多天皇の第八皇子。

あながちに好む

かの逢坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、かの琵琶を極めて聞かまほしく思ひけれども、盲の家異様なれば行かずして、人をもてうちくゝに蟬丸に言はせける様、など思ひかけぬ所には住むぞ、京に來ても住めかし。」と、盲これを聞きて、その答をばせずしていはく、

世の中はとともかくてもすごしてん

みやもわらやもはてしなれば

と、使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心にくゝ覺えて、心に思ふ様、われあながちにこの道を好むによりて、必ずこの盲に會はんと思ふ心深し。それに盲命あらん事も難し。また我が命も知り難し。琵琶に流泉、啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべき事なり。只この盲のみこそこれを知りたるなれ。構へてこれが弾くを聞かん。」と思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。然れども

蟬丸その曲を弾く事なかりければ、その後三年の間、夜々逢坂の盲が庵の邊に行きて、その曲を今や弾くゝと竊かに立聞きけれども、更に弾かざりけるに、三年といふ八月の十五日の夜、月少しうは



蟬丸 (筆洋一本案)

ぐもりて、風少しうち吹きたりけるに、博雅、あはれ今夜は興あり。逢坂の盲今夜こそ流泉、啄木は弾くらめと思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶をかき鳴して、もの哀に思へる氣

あふさかの關のあらしのはげしきに

しひてぞわたるよをすぢすとて

とて琵琶を鳴すに、博雅これを聞きて、涙を流して、哀と思ふ事限りなし。盲獨言にいはく、あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬ數寄者や世にあらん。今夜心得たらん人の來よかし、物語せん。と言ふを、博雅聞きて音を出して、王城にある博雅といふ者こそ此に來たれ。と言ひければ、盲のいはく、かく申すは誰にかおはする。と。博雅のいはく、我はしかくの人なり。あながちにこの道を好むによりて、この三年この庵の邊に來つるに、幸に今夜汝に會ひぬ。盲これを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅、流泉、啄木の手を聞かん。と言ふ。盲、故宮はかくなん、彈き給ひし。とて、件の手を博雅に傳へてけり。博雅、琵琶を具せざりければ、只口傳をもてこれを習ひて、返すく喜びて、曉に歸りにけり。これを思ふに、諸の道は只この如く好むべきなり。それに近代はげに



流泉 啄木

齊藤弓弦筆

然らず。然れば末代には諸道に達者は少きなり。げにこれあはれなる事なりかし。蟬丸賤しき者なりといへども、年ごろ宮の弾き給ひける琵琶を聞きて、極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりなければ、逢坂にはゐたるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなん語り傳へたるとや。
(今昔物語に據る)

二二 美しき故國

矢代 幸雄^(一)

幾年目かの秋を日本に迎へて、忘れた者に再び出逢つて珍しくてしやうのない様に、日本の秋は美しいなと思ひました。平野にはまだ夏の名残が暑く溜つてゐる九月初に、昔行きつけた蘆の湯へ登つて行きました。薄が見たかつたからです。湯の花澤へかけての高原を秋風が渡つて、銀緑の細長い薄の葉は、貫之^(四)の草書の亂れがきは、かうもあらうかとばかり波打つてゐました。湯の宿に滞留し

(一) 畫家、評論家。東京美術學校教授。明治二十三年横濱市に生れた。太陽を慕ふ者の著がある。

(二) 箱根山中にある。

(三) 蘆の湯から約一キロメートル半。

(四) 紀貫之。

てゐるうちに、目に見えて秋が惜しくなつて行きました。今日は寒
いと思つて高原へ出ると、高原の銀色は見違へる様にさえて來ま
した。此所に高原の銀色といふのは、私の好きな薄原の事です。絹絲
の様な穂の藤紫から紅が褪せて、凄愴としてさえた光がまさつて
來たのです。其所に秋風が波打たせてゐました。

日本は綺麗な國だと思ふのです。日本を褒める爲に外國を悪く
言ふ氣はいたしません。唯日本は本當に綺麗な國でした。去年の秋
はイギリス、一昨年の秋はイタリー、その前の秋はスウイスからドイ
ツを通つてイタリーに歸る、もう一つ前の秋はフランス、スペイン
を遊び過ぎて、秋ももう深い頃イタリーに歸つた。自然はどこも美
しい。秋の空が時雨れても、初冬の空がからりと晴れても、國々にそ
の國特有な美しさがある。でも日本の秋——それはまた無上に綺
麗です。

(今殘缺一卷。
秋元子爵家の
藏。筆者、製作
年代共に不詳)



返見の卷繪物語めざね

秋ばかりではありません、日本の春も殊にさうです。今年京都
から中國、九州へと旅して見ました。櫻の花と菜種の花とが到る所
満開でした。菜種が野を黄色くだんだら縞にすると、櫻は山を鹿子
斑にします。土佐繪の夢です。よく古土
佐の繪卷物には、——例へば、ねざめ物
語繪卷の見返に、一面に櫻の花が咲い
て、細い枝と幹との星の様な花が、一面
にみんなこちらを向いて咲いてゐる
圖があります。をかしい程花だらけで
す。あれを美術の學者は、日本畫に於け
る自然の圖案化裝飾化と言ひます。いゝえ、そんな人間の勝手に工
夫したものではありません。あれが日本の自然の相すがたそのすなほ
な日本人の心への印象です。久しぶりに日本の春を歩いて、私は古

(一)長寛二年(一
八二四年)夏
の末に奉納
三十三卷

土佐の繪卷物の國を歩くと云つた様に、華やかに、そして寂しく浮
れました。

それから秋、秋と言へば、この間また平家の嚴島へ納めた^(一)經卷を
見ました。あれは銀の藝術です。金光眩い佛畫の彩色から、王朝時代
の莊嚴藝術が生れる。金莊嚴が洗はれ白く練れて艶麗となり、織巧
となり、遂に銀色の涼しい夢となる。嚴島經卷を見ながら、私は華麗
な神經質の王朝の秋を見た様な心地がしました。日本の秋の一相
が確かに其所にある。經卷の中勸持品でありましたか、料紙裏に、銀
地に群青色の桔梗の花が、小さい星の様に寂しさうに描いてあり
ました。銀河に明るい秋の夜に、見えない小さい星を懐かしむ、それ
ともまた萩薄にしつとりと置かれた白露の圖と言ひませうか。歐
洲の秋の野に銀の光の露の面白さを私は知りません。あちらの牧
場はいち早く刈られて、枝垂れ靡く草の葉がないからでせうか。牧

(二)共に東京市
大森區

畜が盛んで、おいしい草は刈られないうちに、もう放牧の牛と羊と
に根本まで綺麗に食べられてしまふのです。西洋の草場は遠
見が毛氈を敷いた様に綺麗なだけです。運動場の芝生の通りです。
日本の秋の野は曲線模様です。も
の狂はしい旋律です。また薄の事を
言出しますが、武藏野は土壤の肥え
てゐるせゐか、大きな、作つた様な薄
が、よく大根畑にはさまつて生えて
ゐます。私の住む大森から池上^(一)馬込^(二)
の方へかけては、新開地の家の建ち
かけた空地に、思ひがけなく昔の武
藏野の形見かと思はれる程立派な薄が、縦横に曲線幻想を逞しう
してゐる事があります。秋の午後にありがちな、無風の寂滅と言つ



(筆溪杉田安) きょす

た様な静かな光の中に、幻想の薄はこの世ならぬ淨光その物になり
ます。のどやかな日影は長い葉を銀條に、長い穂を金絲に輝かし
て、金銀の豪華な花火を落日の前に揚げ、そして寂しくなつてゐる
様です。

其所に、いつそのこと月があればと想像するのは、私の心が武藏
野の秋の薄の記憶から、何時の間にか宗達の繪模様の中を歩いて
ゐるせゐでせう。宗達はその師光悦(一)が新古今の歌を書きつける卷
物の料紙に、金銀泥で四季の花と草とを思ふさまに描いた事があ
ります。名筆を懐かしんで卷物を繰つて行くと、藤、つゝじの咲く夏
景色から、繪卷が秋に入つて行く。萩原から薄原、大きな薄が秋一杯
に亂れたかと思ふと、一卷の中心點の様に、ほかつと大きな月が、薄
の向ふに、薄模様を著ながら浮びました。ばか／＼しい様です。お伽
話の月よりも不思議です。繪模様の國ならこそあんなに美しい月

(一)野村宗達。畫家。能登の人。家。能登の。古土佐の風を慕つて一派をなした。寛永二二(一八四一)三〇(一八四三)頃の人。
(二)本阿彌光悦。畫家。書家。また刀劍鑑定家。寛永十四(一六三七)年。歿、年八十一。

(一)Napoli. イタリア南部の都市で、海沿いの風光はヨーロッパ第一と稱せられる。
瞥見的感銘

が出る。——薄の美しさ。それは風に靡く風情をのみ昔から歌はれます。高原に雲垂れて蕭條として靡く薄は、確かに詩人を泣かせますけれども、無風に寂光に浸つて曲線の迷走を肆にする薄も、また一つの夢の花です。亂れた詩想の収め様もない耽美です。

西洋の景色が、西洋の食物の様に、どこか大味の様な氣のするのは私だけでせうか。スウイスは綺麗だけれども、掃除した様な綺麗さです。イギリスの田舎は平遠閑雅、綠蔭に清流緩やかにめぐつて、丁度うまく白鳥が浮んだりして、えも言はぬ眺です。けれども、なかだかびきに飽きてしまふのは、やかましく賞められる英國の風景畫に飽易いのと、大した違はありません。イタリアの青空は眼も痛いくらい鮮かです。ナポリの白い建物の尖端をしつくりと限る濃藍とも、紺青とも、群青とも言ひ様のない永遠相の空も、瞥見的感銘の激しいわりに、あとに残る感じは大ざつはです。何故でせう。

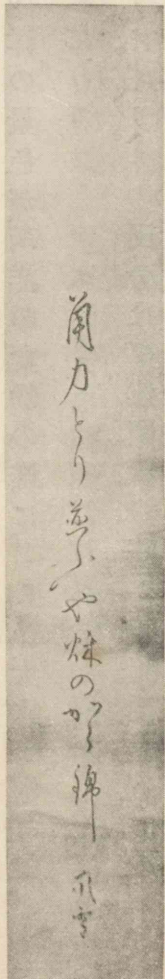
(一)服部氏。俳人。芭蕉の門人。寶永四年(一七二七)歿。年五十四。
 (二)向井氏。俳人。芭蕉の門人。寶永元年(一七二四)歿。年五十四。
 (三)西山氏。俳人。談林派の祖。天和二年(一七八二)歿。年七十八。
 角力とり並ふや秋のから錦

(四)北村氏。國學者。俳人。寶永二年(一七二五)歿。年六十五。
 (五)高桑氏。寛政十一年(一七九八)歿。年七十九。
 嵐雪

二三 黄菊白菊

黄菊白菊そのほかの名はなくもがな
 秋風や白木の弓に弦はらん
 名月や池をめぐりて夜もすがら
 白露や無分別なるおきどころ

宗芭去嵐
 因蕉來雪



蹟筆雪嵐

まざくといますがごとし魂祭
 いなづまやきのふは東けふは西
 小坊主の門に立ちけり秋の暮
 山は暮れて野は黄昏の薄かな

燕 闌其季
 村更角吟

二四 四季小品

一 春雨

萱ふける軒は雨の音しづかにて、池水のあやこまやかなるに、いと深う霞める梢より、翅しをれたる鳥どもの、そこはかとなく飛びわたるなど、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今ひとときは心しみぬ。風少し吹出でて、燈火のまたきたるに、何とも知らぬ花の香の、ほのかにうちかをりたるなど、もをかし。

中島廣足

二 風鈴

月の晴れわたり、花の散行くとき、を告ぐる、いと哀なり。かの入相、曉うち定めたるたぐひならんや。まして水無月の照る日かげろひて、竹の若葉、松の葉末、そよめきいでし夕暮に聲あはせたる、物

香川景樹

— 檀園文集 —

(二)江戸時代の歌人。桂園と號した。京都鳥取に住んだ。天保十年(一八三九)歿。年七十六。

(一)江戸時代の國學者。檀園と號した。熊本の文久四年(一八六二)歿。年七十三。

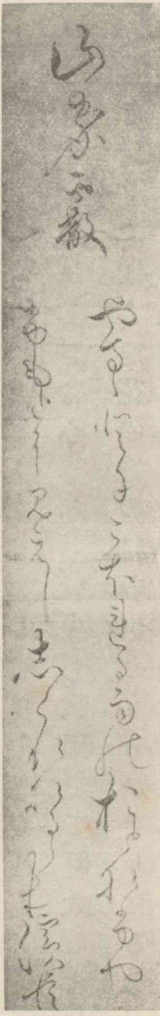
(一)江戸時代の國
學者、松の屋
と號した。備
中の人。天保
十一年(二五
〇一年)歿。年
七十七。
ひた

山家叢
やまゝとに
こほれる雨
のおとふに
やふもしく
見えししく
れなるらむ
濱臣

にも似ず。 — かるかや集 —

三 きぬた 清水濱臣

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむも
またしきる。雁がねのきぬたをさそふにやあらん。きぬたの音の雁
がねに通ふにやあらん。あなあやし。あなあやし。そもこの音の悲し



清水濱臣筆蹟

きか。住む里の寂しきか。打つをりの憂き故か。皆あらず。聞く人の心
の寂しきなり。

四 秋の山田 藤井高尙

秋の山田は夜こそ殊に寂しきものの流石にをかしくはあれ。あ
やしの小屋に賤の男が起きゐて、ひた引きならしつゝ、鹿猿を驚か

音なし
いぎたなし

(一)江戸時代の國
學者、名は實
芳。閑田子と
號した。近江
の年。二四六
四年歿。年七
十六。

(二)漢の武帝の秋
風辭の句。

し、谷水の流にかけたるひたの、おのれと音するなど、とりあつめて
哀なる事多かり。かく心を盡してもるとはすれど、曉近うなりては、
うちまどろむにやあらん、物の音なしもたえく。なれば、小屋近く
鹿の寄り來つゝ、何のかひよとうちなきたるは、いぎたなさをいさ
め顔なりや。

五 冬のころ 伴蒿蹊

花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がくれ、木の芽春雨も時雨
に變り、それも何時しか染めぬべき物なくなりぬれば、みぞれに移
りて雪と積る。一歳の月日は隙行く駒の程もなきかな。振分髪の方
なる子が大人しくなりぬと言はれしなん、やがて老のはじめにて、
終にひげ髪の白くなりぬるをしもつくくと思ひ比べて、埋火の
許にのみうづくまるを、若き人々はさこそ見苦しと思ふらめ。我も
またしかぞありし。少壯いくばく時ぞ、老をいかん。と詩にも聞ゆる

(一)史記、賈誼傳。

(二)後漢書、馬援傳。

未飽花
らんかむに
よりにむか
ふもけふ幾
日あかぬこ
ころを花も
しらなむ
蒿 蹊

を、徒に朽果てぬる事の、今更に悔ゆるもかひぞなき。前の車の覆るを後の車の戒てふ事もあり。我にな倣ひ給ひそよ。冬は歳の餘りとも言ふを、この頃の雪を集め、長き夜を空しくないね給ひそと言はまほし。老いては益、壯なるべしと勇みし人は、己が類にはあらず。唯寒きにたへねば、ひたやごもりに籠る程に、ねぶりは宵より兆して、

未飽花

あんなうしろのいしやまの
あんなうしろのいしやまの
あんなうしろのいしやまの

伴蒿蹊筆蹟

しかも夜深くは目覺めぬ。冬も憂し。老も憂し。こは老の心をうつすとや言はん、冬の心をうつすとや言はん。 — 閑田文章 —

帝國實業讀本 卷七終

浦野製

昭和七年十一月一日印
昭和七年十一月三日發行
昭和八年七月十七日訂正再版印刷
昭和八年七月二十日訂正再版發行

帝國實業讀本

定價
自卷一至卷六 各金六拾錢
自卷七至卷八 各金七拾四錢
自卷九至卷十四 各金九拾壹錢

版權所有



編者 芳賀 矢一
訂補者 上田 萬年
同 長谷川 福平
發行兼印刷者 東京市神田區神保町一丁目三番地 會社 富山 房
代表者 同所合資會社富山房社長 坂本 嘉治 馬
印刷所 東京市小石川區音羽町七丁目六番地 富山 房 印刷部

發行所

東京市神田區
神保町一丁目三番地

會社 富山 房

電話 神田二一七一—二二七八番
攝替口座東京五〇一八番

